

8 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10<sup>18m</sup> 1 2 3 4 5

始



364-102



トスルト小話文庫

第一編

蠟燭と老人

外三篇

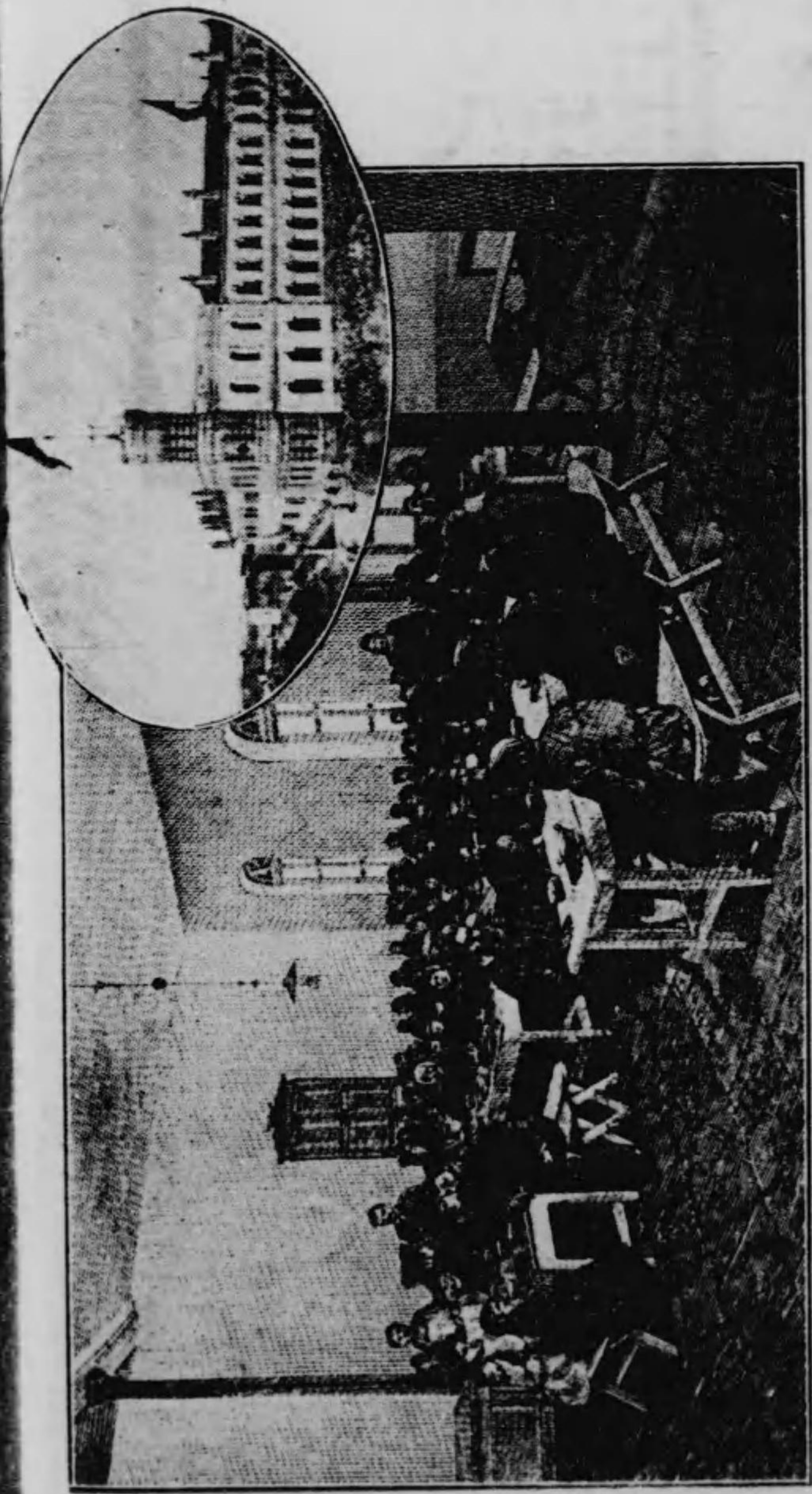
昇曙夢譯

……かうして私は民衆の生活や教理を研究し始めたが、その研究を進めれば進めるほど、眞の信仰の彼等の中にあることを確信するやうになり彼等の信仰は彼等にとつては必要なるものであり、ひとり彼等の生活に意味と可能性とを與へる唯一のものであることを確信するやうになつた。

——「我が懺悔」より——

6. 2. 21  
内交

(上)エルサレムに於ける西出所張所(下)堂食般の内の所張出



### 『トルストイ小話文庫』發行の旨趣

杜翁は、その晩年の藝術觀に於いて、「明瞭」「單純」「簡潔」を以て藝術の要素とし、一般的といふ事、宗教的感情を傳ふるといふ事に、藝術の究竟地を求めた。而して此見地によつて筆を執つたもの、即ち、翁が自ら最善のものとして許した其の藝術が、この文庫の中に收めたる小話の幾十篇であつて、ロマン・ロオランが「これは現代の藝術に於いて獨特の作である。それは藝術よりも更に高い」と讚したものである。トルストイの聲は、これ等の小話に依つて、はじめて普ねく民衆の胸に徹した。トルストイは思想界はた文壇の専有す可きではない。トルストイは萬人の教師である。こゝにトルストイの大精神を、普ねく一般に普及浸潤せしめんが爲に、この叢書を上梓し、之を眞に讀む可き書に餽ふたる一般社會に薦める。

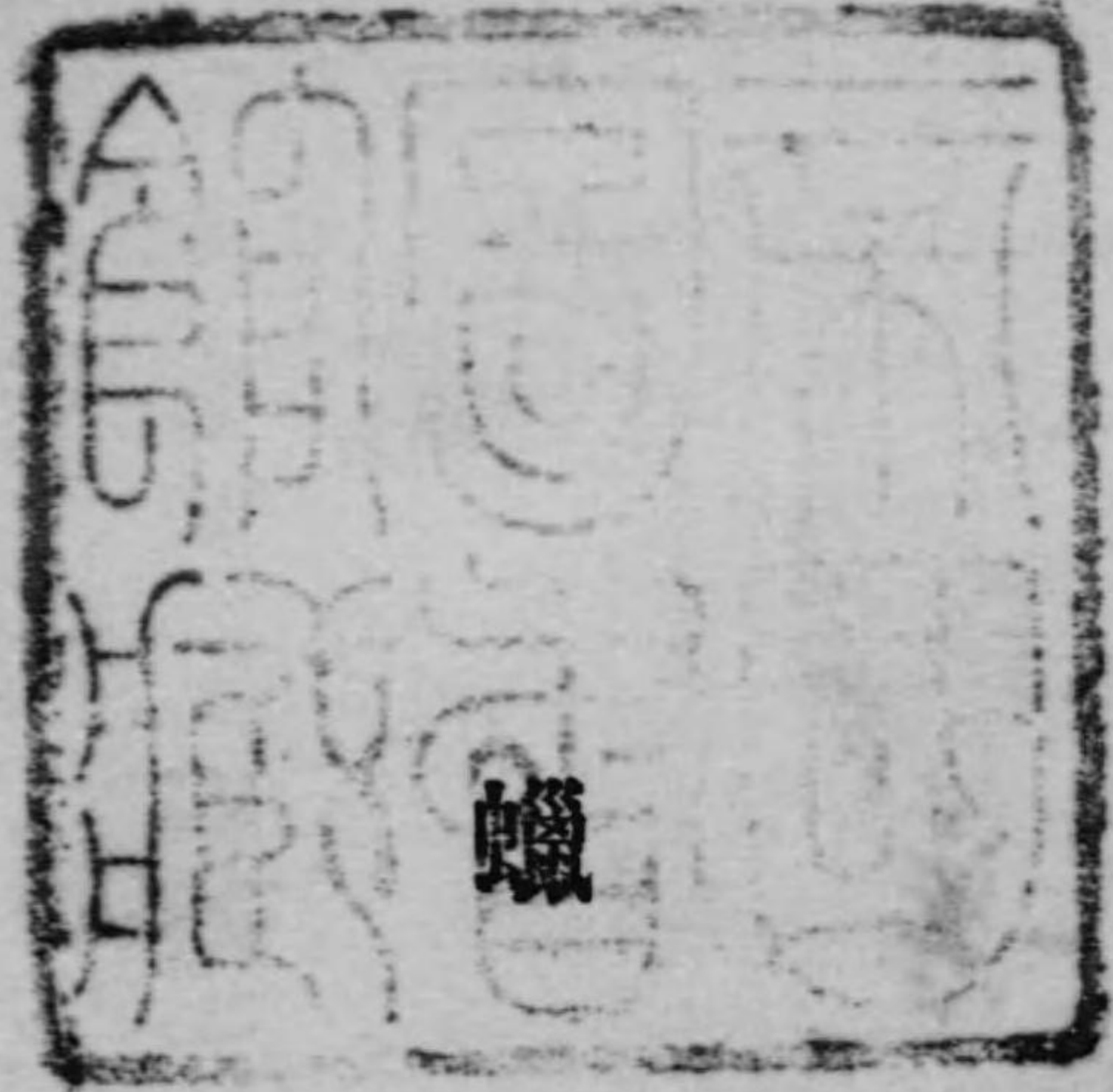
## 解題

◎『トルストイ小話文庫』の爲めに、杜翁が數多き通俗物語の中から『蠟燭』及び『二老人』を選んで譯した。『蠟燭』は、一八八二年の作で、四福音書を平易な物語の中に寓せるもの。神はすべてを見給ひ、神はすべてをさばき給ふ、義しき者、つゝましく素直すなはに信深き者には必ず神の恵ある可く、よからぬ者は必ず滅びるであらう——といふ意味がその中に語られてゐる。又、その一端に於いて、社會問題に對する翁の態度と見解とを暗示してゐる。

◎『二老人』は、傍題を『愛と善行』といふ。二人の老人の聖地巡禮を材として信仰の要諦は、愛と善行とにあるといふことを示したもので、信仰とは何ぞ

や、乃至宗教とは何ぞやといふ問題に對する翁の独自の見解を具象化して最も平易明快に語つたものである。翁の宗教論、信仰觀の、あくまでも倫理的な實踐的な色調は、此の一篇の假作物語の中に、色濃く浮び出てゐる。一八八五年の作で、所謂『通俗物語』乃至『民話』として世界の文學に於いて最も異彩を放てるシリーズの中の、最も傑れたる、又、最も著名なるものゝ一つである。

◎卷末別に小話三篇を添へた。いづれも寥々たる短篇ながら、深く考へねばならぬいろ／＼の意味を含んでゐる。人は此の書の前に、首を垂れないではゐられぬであらう。



蠟

— 目 次 —

● 蠟

燭

..... 五

◎ 二

老

人

..... 五

附 篇

(一) 女の子は老人よりも剛巧である..... 一七

(二) 悪魔に依る者は脆く神に依る者は強し..... 二三

(三) 二人の兄弟と黄金..... 二三

目にて目を償ひ齒にて齒を償へと言ふこと有は爾曹が聞し所なり。然ど我なんじらに告ん、惡に敵すること勿れと。

(馬太傳五章三八節、三九節)

未だ農奴制が行はれてゐた時代の事である。種々様々な地主があつた、中には死の際に神を懐ひ出したり、人を憐んだりした者もあつたが、また斷末魔の息の下まで酷い犬のやうな心を捨て得ぬ地主もあつた。けれども農奴から出て、下層社會から出て、大名になり濟ました旦那ほど悪い者はゐなかつた。

た。此の成り上りの旦那の下では殆んど生きてゐる心地もしなかつた。

旦那の領地にはそのやうな代理人が置かれ、農民達は小作地で暮してゐた。土地は廣く、地味は肥えてゐた。水も、草場も、林もあつた。で、地主であらうが、百姓達であらうが、勝手に凡てを自分の所有にすることが出来たのだが、地主は他の領地から出た自分の家來を代理人にした。

代理人は權力をもつて百姓達を苦しめた。彼自身家庭の人で、妻と、結婚した二人の娘があり、金銭も最う大分儲けてゐたので、後生のよい暮しをして行かうと思へば幾らも出来たが、兎角邪推深く、罪な事ばかり爲てゐた。事は彼れが一日分の定つた勞働以外に百姓達を小作地へ追出す事から起つた。

彼は煉瓦工場を建て、農婦や百姓達をそれに酷使しながら、出来た煉瓦は勝手に賣り拂つたので、百姓達は莫斯科へ行き地主に事情を訴へたが、其の骨折甲斐がなかつた。地主は何の解決も與へずに百姓達を追ひ返して少しも代理人の我儘を壓へては呉れないし、代理人は亦百姓達が自分を訴へたを知つて、その復讐を自ろんだ。で、百姓達の生活は益々苦しくなつたが、百姓のうちにもよくない奴があつて、自分の仲間を代理人に訴へたり、お互に密告し合つたりするので、彼等の間が紛擾だし、代理人は腹を立てた。

かくて、代理人は百姓達から猛獸のやうに恐がられるやうになつた。彼が馬に乗つて村を見廻る時には、百姓達は狼にでも出會つたやうに散々に逃

げて代理人の眼に止らないやうにした。百姓達が自分を恐がるのを見ると、代理人は更に一層腹を立てた。鞭を揮つて、彼等を酷使した。百姓達は非常に苦んだ。

斯う云ふ悪い奴は生かしておけぬといふので、百姓達は相談を始めた。百姓達は何處か人の知らない所へ集つた。或者は大膽なる提議を爲した。「俺等、何時まであねえな悪漢に苦しめられてゐるだ！皆で打殺すべし、——あねえな悪漢を殺すなア罪でも何でもありやしねえや！」

復活週間前の或日、百姓達は林の中で集つた。代理人の命令で林を切り拂ひに來たのであつた。百姓達は晝飯のあつまりで、評議を始めた。

「最う斯うなりや、我慢も何も出来たものでねえ」と、彼等は言つた。「彼奴の爲めに俺達は根まで断されるに違えねえ。夜晝酷え仕事べえさせやがつて、俺達も女郎共も息を吐く暇も無え始末だ。此の分ちや今に叩き殺されて了ふべえよ。彼奴に打擲されてセミヨンはくたばる、アニシヤは極で苦しめられる。俺達だつて何ねえ目に會ふか分りやしねえ。彼奴は晩方此處へ來やがつて再た酷えしべえから、其の時、彼奴を馬から引摺り落して斧で打ちめすだ。それでちやアんとかたが附かア。而して犬のやうに埋めちまへやそれつきりさ。皆氣を合せて、裏を掻かねえでやるだ。」

斯う言つたのはワシリイ・ミナーエフである。彼は代理人に對し誰よりも

烈しい憎惡の念に燃えてゐた。代理人は毎週のやうに彼を打擲し、彼の妻を奪つて自分の下女にしたのである。

百姓達は斯う相談をした。晩方になると代理人が馬に乗つてやつて來た。やつて來るや否や、彼は百姓達が自分の命令通りに樹を切らなかつたと云つて怒つた。而して切り倒された木の中に一本の菩提樹があるのを見附けると「俺は菩提樹を伐り倒せと言ひ付けやしねえぞ。」と、怒鳴つた。「誰が切つたんだ？ さア言へ、でねえと、野郎共全體を酷い目に合せるぞ！」

代理人は何人の切つた區境に菩提樹があるかと調べ始めた。皆、シドルだと言つた。代理人はシドルの顔が血みどろになる程殿つた。更に、伐り



方が少ないと言つてワシリイをも鞭で叩いた。而しては歸つて行つた。

晩になると百姓達は再た集まつた。ワシリイは怒鳴つた。

『やい、てめえ達！てめえ達は人間ぢやねえや。雀だ。』屹度やる、屹度やる』  
と言つときやがつて、愈々となると皆な臂込みをする。宛然雀が隼と喧嘩  
しに集つてるやうなものだ。『怖ねえ、怖ねえ、屹度やる、屹度やる』と言ひな  
がら、隼が飛んで来ると皆蕁麻の中へ逃げ込んぢまやがる。隼は自分の要る  
奴を一匹捉えて引裂く。と、雀共は飛び出してチュウ、チュウと囀る、一匹足  
りねえのに氣が附くと「捉られたなア誰だ？ワリーニカだ、へえ！しかたがね  
えや、それが當然だ」と吐す。お前達もさうだ。裏を掻かねえと言つたからに

や掻かねえがいゝや！彼奴がシドールを捉えた時、みんなしつかりやりや、そ  
れで苦もなく片は附いたんだ。『裏を掻かねえで、氣を合せてやる。』と言つと  
きながら、奴が飛んで来ると、すぐ藪の中へ逃げ込んぢめえやがつて！』

百姓等の相談は益々頻繁になされた。代理人を殺す相談が其中にすつかり  
纏まつて了つた。復活週間に燕麥を蒔くことが出来るやうに代理人は受難週  
間に畑を準備して置くと百姓達に告げた。之を聞くと百姓達は非常な侮辱を  
感じた。で、彼等は受難週間にワシリイの家の裏庭に集まつて評議を始めた。  
『彼奴は神様を忘れてやがる。』と彼等は言つた。『こねえな事をさせるちうな  
ら、何が何でも殺けて了はなけやなんねえ。皆力を合せなけやなんねえ！』

そこへピョートル・ミヘーフも来た。彼は謙遜な百姓で、他の人達の相談に加はらなかつた。ミヘーフは彼等の話を聞いて、斯う言つた。

「兄弟衆、お前達はえらい悪事を目ろんでるでう、人一匹を殺すちふ事はこりや、大きな事だ。他人を殺すなア譯もねえが、自分を殺すとしたらどうだねえ？なるほど彼奴は悪い事を爲てる、がお前さん方も代理人に悪い事を爲てる。兄弟衆、辛抱が肝心だてな。」

ワシリイは此の言葉に激しい怒りを感じた。

「分りきつた事をべらく言ふない。」と、ワシリイは言つた。「人を殺すのが罪だぐれえ云はれなくても知つてらア。だがな、それも人によりけりだ。」と

彼は言つた。「善い人間を殺すなア罪に相違えねえや。だが、あねえな犬を殺すなア神様の御言ひ附けた。いゝか、狂犬を殺すなア人間を可哀想だと思ふからだよ。あんな奴ア殺さねえ方が、よつほど悪いや。彼奴はどねえに人を苦しめやがるか！俺達が奴を殺すなア皆な人の爲めなんだ、人は俺達にお禮を言はア、べちや／＼言ふない！彼奴は皆なを死ぬ苦みに會はせてやがるんだ。ミヘーフ、下らねえことア言はねえもんだ。基督様のお祭に野良稼ぎをするのが、罪で無えと思ふか、手前だつて行きやしねえだらう！」

「何うして行かねえ事があるべい？」と、ミヘーフは言つた。「行けと言はれりや野良仕事にだつて行くよ。それが罪にならうかつて、そりや俺の所爲ちや

ねえんだ。誰の罪か神様はちやんと知つて御座らつしやる。俺達ア唯神様を忘れさへしなげやそれでいゝだ。兄弟衆。』と、彼は言つた。『俺は自分の考へを言ふちやねえ。俺達は悪で悪に酬ることを知つてるが、神様の法律には従はにやなんねえだ。それはまた別なものだよ。お前達は悪で酬いやうとするが、すればその悪はお前のものになつてしまふんだ。人間を殺すなんて懶巧なやり方ちやねえよ！その上、お前の靈に血がこびり附くてなア。さうだ人間を殺すこたア、自分の靈に血をなすりつけることだ。お前は悪い人間を殺すんだと思ひ、代理人が悪いことを爲たと思つてるが、よく考へて見ねえ、お前の方が反つて悪い事をしあつてる事に氣が附かねえか、不幸には従ふがいゝ

だ、さうすりや不幸がお前に従ふだよ。』

百姓達は種々と思案を重ね評議を重ねた、或者はワシリイと共に殺さうといきまき、或者はピートルと共に、罪を作らずに辛抱することに傾いた。

百姓達は復活祭の日曜日を祝つた。晩方になると、地主の屋敷から村長と村役人とが来た。何でも代理人のミハイル・セメノウイチが明日百姓達の手べてに鋤や鍬を持たせて燕麥畑を耕させるやうに言ひ附けたと言ふことである。村長は村役人と共に村を廻り歩いて皆に明日畑に出るやうにと、そして誰某は河向うへ、誰某は大街道の方へと命を告げた。百姓達は悄氣かへつたが、命に背く勇氣もなく、翌朝になると鋤を擔いで出かけた。而して耕やし

始めた。教會では朝の祈禱の鐘が鳴る。人々は何處でも祭を祝つてゐる——が、百姓達は耕してゐた。

代理人のミハイル・セメノウイチは朝遅く眼を覺して、家事を見廻つた。家族の者達——妻と寡婦の娘（此の娘はお祭に來たのであつた。）——は身じまひをしてゐた。下男は彼女等の爲めに馬車の用意をしてゐた。やがて二人は祈禱に行つて歸つて來た。下女は沸湯器を沸した。セメノウイチも歸つて來て皆一緒にお茶を飲み始めた。セメノウイチは鰹腹お茶を飲み、烟草を喫つて、村長を呼びつけた。

「何うだ、百姓共を畑に遣つたか？」

「遣つたで御座りやすよ、ミハイル・セメノウイチさま。」

「皆畑へ出たか、何うだ？」

「皆出やしたとも。俺、自分で野郎共を、それぐの持場へ追ひ遣りましたで。」

「追ひ遣るは追ひ遣つても、よく働いてゐるか何うだか？ 貴様行つて見て來い、俺はお晝過に行くから、それまでに二人で一デシャティーナを耕やして置くやうに言つとくんだ、すぐに良く耕やすやうにだぞ！ 野郎共若し横着な事でもしようものなら俺はお祭だからつて用捨はせんからな！」

「畏まりやした。」

村長が出かけやうとすると、セメノウイチは彼を呼び戻した。しかし、何の爲めに呼び戻したのか分らなかつた。何か言ひたいと思つたのだが、何ういふ風に云つていゝか分らなかつたのである。で、暫時口籠つた後、遂々口を切つた。

『それから、野郎共が俺のことを何と噂してゐるか聞いて来て呉れ。誰が悪口を吐いてゐるか、何と言つてゐるかすつかり俺に聞かせて呉れ。俺は野郎共がどんな風に思つてやがるかを察してゐるんだ。奴等は働きたくないんだ。たゞ寝轉んだり、徘徊いたりしたいんだ。大食したり、お祭をしたりすることばかりが好で、時節を過すと耕作が後れるなんて云ふ事は一向考へや

がらん、野郎共の言つてゐることを聞いて、誰が何と言つてゐるか、すつかり俺に知らせて呉れ。俺はそれを知つて置く必要があるのだ。すつかり話して呉れ、何事でも隠しちやならんぞ。』

村長は馬に乗つて百姓達のある畑へ出かけた。

代理人の妻は、夫と村長との會話を聞いて、夫の傍に寄つて懇願した、彼女は淑やかな、善良な心操の女で、折さへあれば百姓達の爲めに夫に忠言を呈した。

『ねえ、お前さん、ミーンエンカ』と、彼女は言つた。『後生ですから大祭日には百姓達を休ませておやんなさいよ。罪な事をしないで。』

ミハイル・セメノウィチはそれには耳を假さないで、あたまからおしつけて了つた。

『何だ』と、彼は言つた。『此頃久しく鞭の目に逢はねえので、そろくつけ上りだしたな——そんな事より自分の仕事のことでも考へろ。』

『ねえお前さん、ミーシエンカ、私はお前さんのことで良くない夢を見たんですよ。だから私の言ふことを聞いて百姓縫を休ませてお遣んなさいよ！』

『何だ』と、ミハイルは言つた。『お前大分口巾つてえことを云ふね。又、ぶん擲られようと思つて——、これだぞツ!!』

セメノウィチは赫として、煙管を妻の齒におしあてた。而して晝飯を持つ

て来るやうに妻を追ひ遣つた。

セメノウィチは煮凝と、圓麵麩と、豚肉の入つた野菜汁と、子豚の焼肉と、眞白い素麵とを食べ、櫻酒を飲んだ。而して女中を呼んで歌を唄はせ、自分は三絃琴を取つてそれに合奏した。

彼は大陽氣になつて、三絃琴を弾いたり、調子を直したり、女中と笑ひ興じたりしてゐた。其處へ村長が入つて來た。一寸お辭儀をして、畑で見た事を報告し始めた。

『何うだな、皆耕やして居るかな？ 定めたどけを耕やして了つたかな？』

『最う半分以上耕やしまして御座りやす。』

『ごまかした所はなかつたか？』

『ありましねえだ、立派に耕やして居りやしたよ、皆お前さまを怖れて居りやすだ。』

『では土のこなれはよく出来てるか？』

『土のこなれは柔らかなもんでがす。罌粟が蒔けるやうでがすよ。』

代理人は暫時黙つてゐた。

『で、俺のことを何う云つてゐた？ 何と悪口を吐かし居つた？』

村長が口籠るのを見て、セメノウイチはありのまゝ、残らず言へと命じた。

『すつかり言つて了へ。作り言をまぜずに、そのとほりに云つて聞かせる。

ありのまゝにさへ言つて呉れりやア、お前に褒美を遣る。隠し立てと、すると其のまゝには置かねえぞ。おい、カチューシャ、村長に一ばい火酒を飲ませて元氣附けて遣れ。』

女中は村長に火酒を持つて来た。村長は祝ひの言葉を述べて火酒を飲み干し、口を拭いて語り始めた。「なアに、構ふもんか、百姓達が此の人を譽めねえからつて俺の罪ぢやねえ。すつかり言へと言ふんなら言ふべえよ」と、村長は考へた。村長は思ひ切つて語り出した。

『不平を言つて居りやすだよ、ミハイル、セメノウイチさま、不平を言つて居

りやすだよ。』

『何と言つてゐるんだ、それを聞かせて呉れ。』

『誰の言ふことも皆な同じですが、お前さまが神様を信じて御座らつしやらねえだつてね。』

代理人は笑ひ始めた。

『そんな事を』と、彼は言つた。『誰が言つたんだ？』

『皆言つて居りやすだよ。お前さまが良くねえ事ばかりさつしやるだつて言つて居りやすだよ。』

代理人は笑つてゐた。

『さうか、分つた。』と、彼は言つた。『だが、誰が何と言つてゐたか別々に聞かせて呉れ。ワシカは何と言つてゐた？』

村長は自分の百姓達のことと言ひたくなかつた、が村長とワシリイとは疾くから仲悪になつてゐる。

『ワシリイ奴は』と、村長は言つた。『誰よりもひどく悪體を吐いて居りやすだよ。』

『で、何と言つてゐたんだ？——言つて了へ。』

『こゝで言ふさへ空怖ろしいこんだ。屹度お前さまを殺して見せると言つて居りやすだよ。』



「なに、野郎奴！」と、代理人は言つた。「何を吐しやがる。殺されてたまるか、あんな奴に殺されてたまるもんか。よし、ワシカ、相手になら何時でもなつてやるぞ。で、ティシカは——此奴も矢張りナだが何と言ひ居つた？」  
「皆碌な事ア言つてはゐましねえだ。」

「で、何と言つてた？」

「でも云ふのすら身慄ひがしやすだに。」

「何が身慄ひだ？。びく／＼せずと言つちまへ。」

「では言ひやすべえ、お前さまの腹を突き破つて臍をさらけ出すと言つて居りやしたよ。」

セメノウイチは非常に喜んで、ハツ、ハツ、ハツと笑つた。

「誰が先に臍をさらけ出すか見てゐやがれ。さう言つたのは誰だ？ ティシカか？」

「ティシカだけぢや無え、何奴も碌なこたア言つてなかつたよ。皆怖ろしい悪體を吐いてたよ。」

「では、ピョートル・ミヘーフは何うしてゐた？ 奴は何と言つてゐた？ あの野郎も矢張り悪體を吐いてゐたんだらう。」

20 「うんにや、ミハイロ・セメノウイチさま、ピョートル丈は悪口を言つてゐなかつたよ。」

『何を言つてゐた？』

『大勢の百姓共のうちで彼の男一人何にも言つてゐなかつたよ。ほんとにあれは惻口な百姓ですが。俺も彼奴にや吃驚しやしたよよ、ミハイル・セメノウイチゴさま！』

『何だ？』

『何うも、彼奴のす。こたあ！——百姓共も皆驚ろいてゐやしたよ。』

『何をしてたんだ？』

『何も不思議でなんねえですがすよ。俺が彼奴の傍に行つた時にや、彼奴はトルキンの頂上の坂になつた一町歩の土地で耕やして居りやしたよがな、俺が

寄つて行くと誰か歌を唄つてる聲が聞えるだ。細い聲で、それがまた巧えんですがすよ。そして鋤の柄と柄の間に何か光つたものがあるんですがす。』

『それで？』

『丁度火のやうに光つてるんですがすよ。で、段々近寄つて見やすと、五錢の蠟燭が一本鋤の横木にくつ着いたまゝ燃えてるんですがすが風が吹いても消えねえんですがす。而して、彼奴は新しい襦袢を着て歩いては耕し、耕しては復活祭の歌を唄つてゐやしたよ。で、どんなに鋤をぐるぐる廻しても、振つても、蠟燭は消えねえんですがす。彼奴は俺の眼の前で、梶棒を振つたり廻したり、鋤を上げたりしたが、矢張り蠟燭は燃えてゐて消えねえんですがす！』

『で、何と言つてた？』

『何とも言ひやしねえですがすよ。たゞ俺を見ると、復活のお祝を言つて、また唄ひ出しやしたよ。』

『お前は彼奴に何か言つたか？』

『俺、何にも言はねえうちに百姓達が寄つて来やして、みんなして彼奴のことを笑ひ始めたんでがす。そしてやい、ミヘーイチ、復活週間に畑を耕してたんちや、生涯罪を潔めることあ出来ねえぞなんて言つてみやしたよ。』

『で、彼奴は何と言つた？』

『なアにね、彼奴はたゞ「地には平和来り、人に恵臨めり！』と言ふだけで

——再た鋤を搦んで馬を追ひ乍ら、低い聲で唄つてみやしたよ。それで矢張り蠟燭は燃えたまゝ消えねえでがす。』

代理人はもう笑はなかつた。そして、三絃琴をさしおき、頭を垂れて考へ始めた。

彼は暫く凝と腰掛けてみたが、やがて女中や村長を追ひ拂つて幕の中へ入り、寢床の上に横はつて溜息を吐き始めた。而して丁度草束を積んだ荷車のやうな音を發て、呻き始めた。その傍へ妻が来て種々と言葉をかけても答へ

ようともせず、唯こんな事を言つてゐる。

『俺は彼奴に敗けたんだ！俺は最う何うしていゝか分らん！』

妻は云つた。「ではお前さん、出かけて行つて百姓達を休ませるといふよ。

さうすりや何でもありやしない！何を事にもびくともしなかつた人が、今頃何うしてさう意氣地がなくなつたんでせうね。」

「俺は敗けたんだ。」と、彼は言つた。「彼奴は俺に勝つたんだ。」

妻は彼に向つて叫んだ。

「敗けた、敗けた」つて同じ事ばかり言つてたつて詮方がありませんよ。出かけて行つて百姓達を休ませて遣りさへすりや、それで氣持がさつぱりするんです。お出かけなさいよ、私は馬の仕度をさせて置くから。」

馬が引き寄せられた。妻は畑へ行つて百姓達を休ませるやうにと夫に説いた。

た。

ミハイル・セメノウイチは馬に乗つて畑へ行つた。村端へ行くと、一人の農婦が彼の爲めに門を開けた。で、彼は村へ入つた。が、人々は皆、代理人の姿を見るとすぐに逃げ隠れて了つた、或者は廣庭の中へ、或者は家角へ、或者は菜園へ逃げ込んだ。

代理人は村ちうを乗り廻つて別な出口へ近づいた、門は閉ざされてゐた。

彼は馬に乗つたまゝ門を開けることが出来なかつたので、門を開けて呉れと頻りに叫んだ。誰も返事をしなかつた。で、彼は自分で馬から降りて門を開け門の傍で再た馬に乗らうとした。片足を燈に掛け、身體を浮かせて鞍に飛

び乗らうとした時、馬は、豚の群に驚ろかされて尖板橋の方へドドツと踰越めいた。彼は大兵な男だったので、鞍に飛び上るや、腹が尖板橋に押し付けられた。尖板橋には鋭どく尖つた棧が一本、他よりも高く突き出てゐた。で、代理人は丁度此の棧に腹をぶつつけたらしく、腹を引き裂かれて地上へ落ちた。

百姓達が畑から歸つて來ると、何の馬も鼻を鳴らして門を入らうとしなかつた。よく前方を見ると、ミハイル・セメノウイチが仰向になつて横はつてゐる。彼は兩手を擴げてゐた。その兩眼は凝つと一處を視詰めてゐた。臍は皆地上に流れ出て、血は水溜のやうに溜つてゐた——地はそれを吸ひ込まな

かつた。

百姓達は吃驚して馬を後へ戻した。が、たゞピートル・ミヘーイチだけは馬から降りて代理人の傍へ寄り、最う呼吸が絶えてゐるのを知ると、彼の兩眼を閉ぢて遣り、馬車の支度をして息子と二人で死人を棺へ入れ、そして地主の家へ運んで行つた。

地主は凡ての事情を知り、罪を感じて百姓達の年貢を許して遣つた。

で、百姓達は神の力が罪の中にあるものではなくして、善の中にあるもの

だといふことを覺つた。

二老人

婦いひけるは主よ我なんちを豫言者と知れり。(ヨハネ傳四章十九節)  
我儕の列祖は此山にて拜し、に爾曹は拜すべき所はエルサレムな  
りと曰。(同二十節)

イエス曰けるは婦よ我を信ぜよ唯に此山のみならず亦エルサレム  
而已にも非ずして爾曹父を拜すべき時きたらん。(同二十一節)

爾曹の拜する者を爾曹は知ず我儕の拜する者を我儕は知そは教は  
ユダヤ人より出るが故なり。(同二十二節)

眞の拜する者露と眞を以て父を拜する時きたらん今その時になれ  
り夫父は是の如く拜する者を要め給ふ。(同二十三節)

二人の老人が舊都エルサレムへの参詣を思ひ立つた。一人は金持の百姓で  
名をエフィーム・タラスイッチ・シエヴェリフと呼ばれた。一人は餘り豊かでない  
エリセイ・ポドロフと云ふ者であつた。

エフィームは火酒も飲まず、烟草も喫はず、嗅ぎ煙草もやらず、是迄一度も  
卑しい言葉で人を罵つたこともないと云ふ謹嚴な確固した律儀な百姓であつ  
た。而して二期も續けて村長になつたが、何の缺點もなく務め上げた彼の家族

は大勢あつて二人の息子と、結婚した一人の孫とが、皆な一緒に暮してゐた。彼は非常に壯健で、房々とした願鬚をもつてゐた。もう七十になつたが漸くその願鬚に白毛が混り始めた位で、腰も未だしやんとしてゐた。エリセイは金持でもなく、貧乏でもないといふ位の老人で、以前は大工をして所々方々歩き廻つてゐたが、近頃は年が寄つたので、家にゐて蜜蜂を飼つてゐる。一人の息子は稼に出、も一人は家に居た。エリセイは至つて人の良い快活な男で火酒も飲めば、喫烟草もやる、歌も好きで、よく唄ふと云ふ風だが、大へん腰の低い男なので、家内の者とも、近所の人達とも仲良く暮してゐた。脊の低い、色の薄黒い、願鬚の縮れた男で、自分の聖人と崇むる豫言者エリ

セイのやうに頭がつる／＼と禿げてゐた。

二人は随分以前から一緒に聖地参拜に出かけようと約束もし、打合せもしてゐたのだが、何分エフイムが時々忙しくなつて出掛けられなかつた。孫が結婚をする、末子が除隊になるのを待つ、小屋を新築し始める、一つ片つくと又一つが始まると云ふ始末である。

或る祭日に二人は出會つた。二人丸太の上に腰を下した。

「時に、俺達は何時巡禮に出掛けようかの？」と、エリセイは言つた。

エフイムは少し顔を曇めた。

「ま、少し待たつしやい！ 今年はどうも面倒な事ばかり出来ての。俺は此



の小屋に百留かけようと思ふてな、最う三分の一は出来たが、仕事の方はまだなかくだ。何うしても夏まではかゝりさうなのでな。夏になつて、若し神様のお許さへあれば屹度出かけようが。」と、エフィームは言つた。

『そんなに延ばしたく無いと俺は思ふが。今出かけるのが一番良いぢやらうが。丁度春だでの。』と、エリセイは言つた。

『時候は丁度えゝが、仕事の方がやりかけたもんだで、何うしても打棄つて行くわけにもいかんしの。』

『お前さんとこに誰かゝるねえのかな。仕事の方は息子さんに任せといたらどうぢやな。』

『何が出来るだ。俺許の体はからきし役にや立たん。飲んだくれたでね。』

『だつて、お前さん、俺達が死んで了や、彼達が何もかもやつて行かなければならんのぢや、息子さんに見させるがいゝだ。』

『そりやさうだが、矢張、自分で見てみるとこで仕事を終へたいでな。』

『お前さん！さう云つてゐた日にや何時まで経つてもきりはないがな。此の間も俺許の女達が祭日の仕度に掃除をしたり、片附けものをしたりしてゐたが。あれもこれもする事だらけで、あとからくと限りもなく出て来よる。』

嫁がかういふのぢや——一寸氣の利いた女ぢやがな——たゞ有難いことにはお祭の方で俺等を待たずにどしくやつて来て呉れる。でないといと幾ら働いた

つてやりきれやしない。』

46

タラスイッチは考へ始めた。

「だがな、俺は此普請で大分金銭をつかつたし、空手で出かける譯にやいかんしの。百留と云やちつとやそつとちやないて。」と、タラスイッチは言つた。エリセイは笑ひ出した。

「冗談云はしやるな、お前さんの身代は俺の身代の十倍もあるぢやないかの、それにお前さんは金銭のことであれこれ言つてゐなさる。たゞ俺の聞きたい事は、何時旅へ出かけるかと言ふだよ。俺は、金銭は無いのだが、しかし何うにか工面をするて。」と、エリセイは言つた。

タラスイッチは微笑して、

「お前さん、なか／＼金持らしいことを言ふの。何處で工面さつしやる？」と言つた。

「なアに、がらくたを少し賣つ拂へば——幾らか出来るだ。それで足りなけりや、蜂の巣を十ばかり棚から下して隣へ譲りますだ。最う疾から頼まれてゐるでな。」

47

「今年は蜂の當り年だで、賣つたら、後悔さつしやるよ。」

「後悔つて？うんにや、そんなことア無え！罪を犯した事の外、人間一生に何にも後悔する事ア無えで。靈魂より大事なものは何にも無えと俺ア思ふだ。」

『そりやさうだが、身代が左前になるのも困るで。』  
『だが、靈魂が左前になつた時が一番困るだ。俺等も折角約束した事だ、い  
一つ都合つけて是非行く事としようぞい。』

二

エリセイは連れを説きつけた。エフイムは散々考へた揚句、翌る朝、エリ  
セイの許へ出かけて行つた。

『愈々行く事にしませうかい。全くお前さんの言つた通りだ。死ぬも生きる

も神様の御旨次第だ、生きてゝ達者でゐられるうちに行かなけりや行く時  
がなくなるので。』

一週間の後、二人の老人は支度にとりかゝつた。

タラスイッチの家には金銭があつた。彼は百留を旅費として有ち、二百留  
を婆さんに残した。

エリセイも支度をした。彼は十個の蜂の巣を棚から下して隣の人に賣つた。  
その十個の巢から幾ら分れても、皆残らず一緒に遺ることにした。これで七十  
留だけ出来たので、不足の三十留は家ちうから掻き集めた。婆さんは自分の  
葬費に溜めて置いた金銭を残らず渡した。嫁も臍繰を皆出した。

エフイム・タラスイッチは種々な用事、つまり何處を何れだけ刈るとか、肥料を何處へ運ぶとか、何う云ふ風に家を建て、何う云ふ風に屋根を葺くとか云ふやうな事を長男に言ひ附けた。何から何まで良く考へて、種々な用事を言ひ附けた。が、エリセイはたゞ賣つた蜂の巢から若いのを巢分けする事と、そのすべてを間違なく隣の人へ渡すこととを婆さんに言ひ附けた丈で、一家の事に就ては何一つ言はなかつた。何を何う爲なければならぬと云ふことは、仕事そのものが教へて呉れるし、また自分達が皆な主人になるのだから、良いやうに爲て呉れるだらうと思つてゐたのである。

二人の老人は支度をした。家の者達は餅を焼いたり、袋を縫つたり、新し

く脚絆を裁つたりした。二人の老人は新しい革の草鞋を履き、豫備の草鞋を持つて出かけた。家族の者達は二人を村端まで見送つて其處で別れた。二人の老人は旅路に就いた。

エリセイは愉快な氣持になつて、村を遠ざかるにつれ、家の事はすっかり忘れて了つた。たゞ途中何うかして伴侶の機嫌を害はないように、それから誰にも無禮なことを言はないように、なほまた平和と愛とに満たされて彼地へ着き、同じ心持で家へ歸るようにと云ふことだけを考へてゐた。で、途々絶えず祈禱を口誦んだり、自分の知つてゐる聖人の傳を憶ひ出したりしてゐた。途中で人に出會つたり、旅宿へ著いたりしても、彼は伴侶の人達に出来

るだけ懇慇にして、神の旨に背かないことを口にするようにと心掛けた。彼は旅を続けるにつれて益々喜びを感じて来た。が、唯一つ困った事がある。彼はそれを廢めるつもりで喫烟草を家へ遺して来たが、それが何うも物足りないやうな氣がしてならなかつた。途中で或人が彼に幾何か分けて呉れた。彼は伴侶に喫む癖をつけぬやうにと、伴侶から離れては時々嗅いだ。

エフイム・タラスイッチも元氣に旅を續けた。矢張、確固してゐて、悪い事をせず、詰らない事を言はなかつた。が、彼には心に落着がなかつた。始終家の事が心配になつてゐた。家では何うしてゐるだらうと、絶えずそのことばかりを考へてゐた。何か言ひ附ける事を忘れやしなかつたらうか、息子

が言ひ附け通りに爲てゐるだらうかなど案じつゞけた。途中で他の人達が馬鈴薯を蒔いたり、肥料を運んだりするのを見ると、彼はすぐに考へた、伴も俺の云つた通りにしたか知ら？と。そして彼は早速家に歸つて、一切の事を指圖し、自分でも仕事をしたくなつたらしかつた。

三

二人は五週間ほど歩いた。家から用意して来た草鞋はもう皆履き破つて、先々で買はなければならなかつた。二人は小露西亞へ着いた。これまでは宿泊

料や食料代はちやんと拂はねばならなかつたが、小露西亞へ來ると、誰でも争つて彼等を欺待し、宿らせたり、食べさせたりしても金錢を取らず、その上行先の用意にと、彼等の袋の中へ麵麩だの乾餅だのを入れて呉れた。斯くて二人は何不自由なく七百露里ばかり旅行し、更に一つの縣を通り抜けると、或る凶作地へ出た。其處の人々は宿らせる事は無料で宿させたが食物は供給して呉れなかつた。減多に麵麩を呉れる處はなかつた。處によつては金錢を出しても麵麩を手に入れることが出来なかつた。去年の凶作の爲めだと土地の者は語つた。富裕な人も幾らかあつたのだが、それもあの時破産して何も彼も賣り拂つて了つた。何うやら暮してゐた連中は其日の暮しにも困つた。貧乏

人達は流浪の旅に出た者もあり、乞食になつた者もあるが、家に踏みとどまつて何うか斯うかやつてゐる者もあつた。冬は初穀や藜などを食べてやつと其日を過して居た。

或る處で、十五フントの麵麩を買ひ入れ、次から次と泊りを重ねて、暑くならないうちに路を抄どらうとして未明に出發した。十露里ばかり行くと或る河邊へ出たので、其處へ腰を下して茶碗に水を汲んでそれに麵麩を浸して食べたり、草鞋を履き代へたりした。二人は暫時休息した。エリセイは煙管を取り出した。エフィム・タラスイチは頭を振つて『何うしてもその悪い樂みが捨てられんかの！』と言つた。

エリセイは手を振った。

『俺はどうも罪に負け易いで、困りやすよ。』と言った。

二人は起上つて歩を續けた。十露里ばかり行くと、或る大きな村へ着いた。が、誰も彼等を休ませて呉れる者はなかつた。天氣は餘程暑かつた。エリセイは休まうと言つた。彼は休んで喉を潤ほしたかつたのである。が、タラスイッチは歩みを止めなかつた。タラスイッチは足が壯健であつた。エリセイは彼の後から隨いて行くのが苦しかつた。

『水を飲まうぢやないかの。』と、エリセイは言つた。

『ぢや——飲まつしやれ。俺は飲みたくないで。』

エリセイは立止つた。

『ぢや、一足先になつて下され、俺は一走して、彼處の百姓家で飲んで來るだ。すぐ追ひ附くでの。』

『さうなされ。』と、タラスイッチは言つて、一人で歩を續けた。が、エリセイは百姓家の方へ、後返りをした。

エリセイは百姓家へ近づいた。壁土を塗つた餘り大きくない家で、下は黒く上は白く塗られてゐたが、その壁土も最う彼處此處剥げ落ちてゐた。長い間塗り變へないものらしかつた。屋根も一方は剥がれてゐた。小屋の中へは庭の方から入るやうになつてゐた。エリセイは庭へ入ると、直ぐに土手の傍

に願鬚のない寝れ果てた一人の男が小露西亞流の短い襦衣を着て横はつてゐるのが眼に止つた。その男は凍えてゐるらしかつた。太陽が彼を直射した。その男はたゞ横になつてゐるだけで、眠つてはゐなかつた。エリセイはその男に聲をかけて水を飲ませて貰ひたいと言つた。が、その男は答へなかつた。「病人かの、何といふ無愛想な人だ」と、エリセイは考へて扉口の方へ近づいた。と、小屋の中には子供の泣聲が聞えた。エリセイは掛金をガチャと鳴らして『もしく〜』と言つたが、答へなかつた。で、も一度杖でトン／＼と扉を敲いて『兄弟衆！』と呼んだが、人の動く氣配もしなかつた。「皆さん！』と叫んでも返事がなかつた。で、エリセイは其處を立ち去ら

うとした。と、其の時、誰かウー、ウーと唸る聲が扉の中から聞えた。「何か不幸があるんぢやないかな？こりや、一寸見てやらにやならん！」と考へてエリセイは小屋の方へ後戻りした。

## 四

59  
エリセイは掛金を外した——銃を下してなかつたのだ。扉を開けて玄關を  
通り抜けると、中の扉は開けた儘になつてゐた。左側には暖爐があり、真正  
面には床の間があつた。床の間の上には祭壇の卓子があり、卓子の向うには



寝棚があつた。寝棚の上には襦袢一枚の、頭髮の蓬々とした老婆が卓子に突俯して坐つてゐた。老婆の傍には蠟燭のやうに瘦せて腹だけ太い男の子が老婆の袖を引張りながら、泣聲をあげて何かを強請つてゐた。エリセイは小屋の中へ入つた。そこにはむかくと胸の悪くなるやうな空氣が満ちてゐた。見ると、煖爐の陰の床の上にも一人の女が横はつてゐた。此の女は俯向に寝てゐて顔も上げない。そして片足をビク／＼と延したり、縮めたりして身體を彼方から此方へ轉がしてゐた。動く度に厭な臭氣が漂よつて来る。彼女は匍ふつもりらしかつた。が、誰も彼女を援ける者はなかつた。老婆は頭を擡げて入つて來た人を見た。

『お前さん、何の御用だかね？何の御用だか？誰も人がゐねえでね。』と、老婆は言つた。

エリセイは老婆の言ふことが分つて彼女の方へ近づいた。

『俺はな、矢張神様の僕だが、水を一口飲ませて貰ひ度えと思つてな。』

『誰も汲む者が居ねえだ。家にや水は無えし、お前さん、自分で汲んで來なさるがい。』

エリセイは『何うしただな、誰も壯健な者がゐねえのかい、あの女を援けてやる人がゐねえのかい？』と訊いた。

『誰もゐねえだよ。一人は戸外で死にかゝつてゐるし俺達も最う此通りで。』

男の子は泣き止んで他所の人を見たり、老婆の話の聞いたりしてゐたが、  
 再た老婆の袖を掴んで『麵麩が欲しい、お婆さん、麵麩が欲しい。』と泣き出した。  
 エリセイが老婆に何か訊かうとした時、一人の百姓が小屋の中へ入り、玄  
 關を通り抜け、寝棚に腰掛けようとして歩いて来たが、鬨の傍の隅にバタリ  
 と倒れて了つた。そして起きようとはしないで何事かを饒舌り始めた。が、  
 彼はその言葉を一句毎に切り、呼吸を續いでは再た他のことを言つた。  
 『病氣には罹るし……皆な飢ゑてゐるだ。……あゝ、飢死するところなんだ！』  
 と、その百姓は言つて、頭で男の子を差しながら泣き出した。  
 エリセイは袋を肩から下し、両手を伸して之れを寝棚に置いた。而してそ

の口を解き始めた。彼は袋の中から麵麩と小刀とを取り出し、麵麩の片端を  
 切つて、百姓に與へた。百姓はそれを受け取らずに、男の子と女の子とを指  
 差しながら『何卒彼達に遣つて下せえ』と言つた。エリセイは麵麩の一片を  
 男の子に與へた。男の子は麵麩の匂を嗅いで、両手を伸して受取ると、直ぐ  
 に、その麵麩片に嚙りついた。と、煖爐の陰からもう一人の女の子が匍ひ出  
 して来て、麵麩を強請んだ。エリセイは女の子にも麵麩を與へた。それから  
 老婆にも與へた。老婆はそれを貰つて嚙み始めた。  
 『彼達が喉を乾かしたので俺は水を持つて来ようと思つてな——昨日だつ  
 たか今日だつたかはつきり憶えては居ねえ——水を汲みに行くと、まだ井戸

へ行きつかねえ間に倒れて了つたよ。誰も持つて行かなけりや、手桶は彼處にある筈だが。」と、老婆は言つた。

エリセイは老婆に井戸が何處にあるかを訊いた。老婆が教へてやると、エリセイは其處へ行つた。手桶があつたので水を汲んで来て皆に飲ませた。子供達は水を飲みながら再麺麴を食べた。老婆も食べた。が百姓は食べようとせず『餘り氣の毒で』と言つた。老婆は起上りもせず、元氣附きもせずに、寢棚の上で悶えるばかりである。で、エリセイは村の店へ行つて粟や鹽や粉や牛酪などを買つて來た、それから斧を捜し、薪を割つて煖爐を焚きつけた。女の子はエリセイの手傳を始めた。エリセイは汁や粥などを煮て皆に食べさせた。

百姓は少し食べた。老婆も食べた。女の子と男の子とは茶碗まで舐めずつた揚句、二人抱合つて寢床の上に横はつた。

百姓と老婆とは何して斯んな事になつたのかと云ふことを物語り始めた。『俺達はこれまでも矢張り貧乏な暮しをして來ましたが、おまけに今年は畑の物が何にも出來ましねえので、貯への品を秋口から食べ始めましたよ、で今はもう残らず食べ盡して、隣近所の人様や、親切な方々などのお慈悲に頼

る外なくなりましてだ。最初の中は皆様も恵んで下さりましたが、さうくは續きませんや。恵んで下され度えにも、てんで下さる物が何にも無えだ。それはもうやれ金銭だ、粉だ、麵麩だと、皆様にはえれえ御迷惑を掛けて居るで、此上御願えするも心苦しいし。かと云つて、捜さうにも仕事の口はなかなかありませんわい。何しろ誰でも皆、仕事を仕事と我勝に目つけてゐるだアでな。だもんで、一日働くと、二日は又目つけて歩くといふ始末だ。婆さんと娘とは遠くへ袖乞ひに出かけて見たよが、なか／＼施こして呉れねえ。誰んところにも麵麩が無えだよ。でも何うやらして生命は繼いで、秋の收穫を待つてゐたよが春になると最うどこでも施與をして呉れる人ア無くなる、

その上に病氣に罹かつたのがすよ。ふんにと碌なことア一つも無えだ。一日食べて二日は食べねえといつた有様で、しまひにや、草をとつて食ふやうになりましたよが、食べた草が當つたと見えて婆さんまで病氣にとつつかれて寝込むと云ふ始末だ。俺も身體が弱つて、最う癒りつこはあるめえと思つてゐるでがす。』

『俺一人で働らいてゐたのがすが』と婆さんが言つた。『食べる物を食べ無えだで力は盡きるし、娘ももう弱つて了つて、たゞもう意氣地が無くなり、一寸近所への使に出る精も無く隅に入り込んで動か無えだ。一昨日だつけか隣の内儀さんが来たよが、俺達が腹ア空らして、病氣になつてゐるのを見ると、

そのまゝ歸つて了つた。その内儀さんも亭主に出て行かれて小せえ子供達を食べさせることア出来無えでがすよ。で、皆な斯うして寝たまゝたゞ死ぬのを待つてゐるばかりで。』

エリセイはその日のうちに伴侶に追ひ附かうと思つてゐたが彼等の話を聞くと、氣をかへて遂々其の夜は其處に泊つて了つた。翌る朝、床を離れるとエリセイは自分が主人でゝもあるかのやうに其の家の仕事に取りかゝつた。彼は婆さんと共に麵粉を捏ねたり、燂爐を焚いたり、また女の子と一緒に必要な品物を仕入れに近所へ出掛けたりした。所が手に入れようとする品物は一つも無い。何も彼も食べ盡して了つて、家畜から衣服からすつからかんにな

つて居る。で、エリセイは入用な物を用意し始めた。自分で出来る物は自分で作り、買はなければならぬ物は買った。斯うしてその日を過し、次の日を過し、三日目も其處で過した。男の子は健康を恢復して、店へ用達しに行つた。而してエリセイによく馴附いた。が、女の子の方もすつかり元氣附いて何くれとなくエリセイの手傳をした。そして何時もエリセイの後から『お爺さん！お爺さん！』と言つて隨つて歩いてゐた。老婆も近所廻りの出来る位に元氣づいた。百姓も壁傳ひに歩くやうになつた。たゞ内儀さんだけはまだ寢てゐたが、これも三日目に正氣附いて食物を欲しがるやうになつた。そこで、エリセイは「自分はこれ程手間取らうとは思はなかつた、最う出かけにやな

らない。」と考へた。

## 六

四日目は齋の明けた日であつた。で、エリセイは「さうだ、一層のこと皆とお祝ひをしよう。お祭に要るものを買つて来てやらう、そして晩に發たう。」と考へた。エリセイは再び村へ行つて、牛乳や、白い粉や、牛酪などを買つた。彼等は老婆と一緒に煮物をしたり、麵麩を焼いたりした。エリセイは朝のうち會堂の祈禱へ行き、歸つて来て皆と一緒に御馳走を食べた。内儀

さんも此の日から床を離れて徐々と歩くやうになつた。百姓は髭を剃つたり、清楚した襦衣を着たりして——老婆は洗濯などをした——金持の百姓に嘆願する爲めに村へ行つた。刈場も畑も金持の百姓に抵當として取られてゐたので、此の憐れな百姓は刈場と畑とを蒔附時まで返して貰へまいかと頼みに行つたのである。百姓はがっかりして晩方歸つて来た。彼は泣いてみた。金持の百姓は無情にも、金銭を持つて来なければ、と言つて承知しなかつたのである。

エリセイは再考へ始めた。「さうだとすれば此の人達は何うして暮して行くだらう？ 他の人達は皆を刈入れに行くのに、此の人達には刈る物が無いの

だ。刈場が抵當に入つてゐるのだ。裸麥は熟して、皆人は收穫にかゝつてゐる。(幸ひ裸麥は良く實のつてゐた。)が、此の人達には收穫れる可きものが何も無い。此の人達は一町歩の土地を金持の百姓に賣つてしまつたのだ。俺が發つと、その後で此の人達は再た路頭に迷ふだらう。」と、エリセイは考へた。彼は種々と頭を悩ました揚句、翌朝に延ばす事として、その晩も出發を見合せた。彼は眠る爲めに戸外へ出、祈禱をして横になつたが、寝つかれなかつた。最う大分金銭と時間とを費つた、發たなければならぬ。が、此處の人達も可哀想である。「何時までも面倒を見てやる譯にゆかぬことは分つてゐる。もうすこし彼の人達の爲に水を汲んでやつたり、麵麩を切つてやつた

りしたいが、しかし、何時までさうしてゐられよう。いつその事、あの刈場と畑とを買ひ取つてやつた方が此の人達のためになる。なほ其上に子供達には牝牛を買つてやり、百姓には穀束を運ぶ馬を買つてやらう。おい、エリセイ・クズミツチ、お前は確かにこんがらがつてゐる。心が亂れて居る。到底解決はつくまい。」エリセイは起き上り、枕にしてゐた上衣を擡げて、烟管を取り出し、嗅烟草を一服やつて、頭をしづめようとした。が、矢張りいろ／＼の考へがこたく／＼として、どうにも決定がつかなかつた。發たなければならぬが、此處の人達も氣の毒である。どうして良いか分らない。エリセイは上衣を枕にして再た横になつた。鶏が鳴く頃まで眠れなかつた。しばらくと

ろとろとまどろんだと思ふと、誰か静かに彼を起した。見ると自分は最うすつかり衣服を着てゐる。袋も杖も持つてゐる。彼は門の外へ出て行かなければならなかつた。が、門は身體一つが辛つと出るくらゐにしか開いてゐなかつた。彼は強ひて門を出ようとする、片側に袋が引掛つた。それを外さうとすると、こんどは片側に脚絆の紐が引掛つて、解けて来た。外さうとしたその袋は不思議にも雑垣に引掛つてゐるのではなく、女の子に抑へられてゐるのであつた。女の子は「お爺さん、お爺さん、麵麩を下さい」と叫んでゐた。又、足下を見ると、男の子が脚絆を引張つてゐる。而して窓からは老婆と百姓とが彼を見てゐる。そこでエリセイは目を覺した。而して、「明日、

畑と刈場とを買ひ戻してやらう。馬と、次の收穫迄の粉とを買つてやらう。子供達には牝牛を買つてやらう。遙々外國まで基督様を探しに行つても、自分の中にある基督様を失へば何にもなりやしねえだ。あの人達を援けてやらにやならねえ」と、聲を出して獨語つた。エリセイは朝まで眠つた。早朝金持の百姓の許へ出かけて行つて、裸麥を買ひ戻し、刈場の爲めにも金銭を拂つた。また賣り拂はれてゐた鎌も買ひ取つて、家へ持つて来た。彼は百姓を刈入にやり、自分は方々の百姓家を廻り歩いて、遂々或る居酒屋の主人の所で、賣物の馬と、荷車とを見附け出した。而して値段の掛合をしてそれを買った。粉も買った。粉袋を車に載せて置いて牝牛を買ひに出かけた。途中で彼



は二人の小露西亞の農婦に追ひついた。二人の農婦は途々何か話し合つてゐた。エリセイはその話に耳を傾けた。そして二人が自分のことを言つてゐるのに氣が附いた。

『初めは何んな人だか分らねえので、たゞの人だと思つたんだつてねえ。何でも水を飲ませて貰えに來たんださうだよ。ところが遂々彼處に逗留つて種々な物を彼の人達に買つて呉れたんださうだよ。俺も今日見たが、居酒屋の亭主から馬と車とを買つてゐただよ。世の中にはまあ珍らしい人もあるもんだねえ。全くたまげつちまただよ。』

エリセイは、自分が讀められてゐることを知つた。で、最う牝牛を買ふ事

をやめにした。居酒屋へ歸つて馬の代を拂ひ、馬を支度して、粉を積んで百姓の家へ向つた。門に近づく、彼は馬を止めて車から下りた。主人達は馬を見て吃驚した。彼等はエリセイが馬まで買つて呉れたのだらうと思つたが口に出しては言はなかつた。そして、主人は門を開けに出て來た。『お爺さん、何處から此馬連れて來たな？』と、主人は言つた。

『買つて來ただ。餘り安いのが見附つたでな。槽の中へ草を刈り込んで、今晚、これに食べさせてお呉んなさい。それから袋を下すだ。』と、エリセイは言つた。

主人は馬を車から解いたり、袋を穀倉へ運んだり、山のやうに草を刈つた

り、それを馬槽の中へ入れたりした。皆な床に就いた。エリセイは街道に寝た。彼は晩のうちに自分の袋を其處へ持つて来てみたのであつた。人々は皆な眠つて了つた。エリセイは起き上り、袋の口を結び、草鞋を履き、上衣を着てエフィームの後を追うた。

七

エリセイが五露里ばかり行つた頃、夜が明けて来た。彼は樹の根に腰を下し、袋の口を解いて金銭を算へ始めた。算へて見ると、十七留と二十哥しか

残つてゐなかつた。「とてもこれだけちや海を渡つては行かれねえ。基督様の御名前を言つて御布施を貰つて行けば行かれねえ事も無えが、夫では却て罪を深くするばかりだ。エフィーム爺はもう一人であちらへ行き着いて、俺の爲にも蠟燭を立て、呉れただらう。だけんど俺ア屹度死ぬまで年貢を納めにやなんねえだ。唯難有てえことには旦那がお慈悲深えから、勘忍して下さる」  
エリセイは起き上り、肩に袋を投げ掛けて後へ戻つた。で、人々の目につかぬようにと迂廻路をしてその村を通り過ぎた。間もなく彼は家へ着いた。行く時の旅は随分骨が折れて、エフィームと連れ立つて歩くのも容易でなかつたが、歸り途には神様のお蔭と見えて、エリセイは幾ら歩いてても疲勞を知ら

なかつた。彼は愉快な氣持で杖を振り廻しながら歩いた。そして七十露里の路を一日で歩き通して了つた。

エリセイは家へ歸つた。最うすつかり收穫が濟んでゐた。家内ちうの者が老人の歸りを喜んだ。そして何うして、伴侶に紛れたのだとか、何うして彼地へ行かずに歸つて來たのかなど、訊き始めた。が、エリセイは何事をも語らなかつた。

「神様が遣つて下さらなかつただ。途中で金銭は使つて了ふし、伴侶からは紛れるし、それやこれやで彼地へ行かなかつたど、何うか悪く思はねえでお呉れ！」と、エリセイは言つて婆さんに残りの金銭を渡した。エリセイは家の

仕事のことを聞き訊した。が、何も彼も立派に片附いてゐたし、家計上の失錯もなく、皆な仲好く暮してゐた。

エフイームの家の者達は其の日のうちにエリセイが歸つて來たことを聞きつけて、自分の家の老人の消息を聞きに來た。が、エリセイは彼等にも同じ事を答へた。

「お前さんとお爺さんは無事に行きましたよ。俺達が別れたのはベートル祭の三日前だつた。俺は直に追ひ附かうと思つたどが、丁度其處へ或る事情が起つて金銭を使ひ果したで、何うしても行くことが出來ねえで戻つて來ました。」と、エリセイは言つた。

人々は、エリセイのやうに賢い人が斯んな馬鹿氣た事を爲たのに——折角出かけて行き着きもしないうちに金銭を使つたことに吃驚した。が、やがてその事も忘れられて了つた。エリセイも忘れた。そして家の仕事に精出した。息子と共に冬の薪を切つたり、女達と共に穀物を搗いたり、それから納屋の冬圍をし、蜂の巢を取り片付け、十箇の巢に、それから殖えた群を添へて隣の人に渡した。婆さんは賣つた巢から分れた蜂群のいくつかを爺さんに隠して置かうとしたが、エリセイは何の巢が分れたか、何の巢が分れなかつたかをよく知つてゐて隣の人に十枚のところを十七枚渡した。斯うしてエリセイは後始末をしてふと、息子を嫁にやり、自分は家に坐り込んで冬の草鞋を作

つたり、巢棚に穴を開けたりしてゐた。

## 八

エリセイが病人達の小屋に留まつた日、エフィームは伴侶を待つてゐた。彼は少し行つて路傍に腰を下し、頻りにエリセイを待つてゐたが、待つてゐるうちにとろくと眠つた。目が覺めてからもまた待つたが、伴侶は來なかつた。彼は眼を大きく開いて見てゐた。太陽は最う梢に没したが、エリセイは來なかつた。「最う俺の傍を通つて行つたのかも知れねえ。或は馬車に（通

りがりの乗つて行つたかも知れぬ。俺は眠つてみたから、俺に氣が附かなかつたのだらう。だが、俺に氣の附かねえ筈はねえがな。こねえ野原では遠くまで見えるになあ。後へ戻つて見るかな、だけんど彼の男は先へ行つてゐるかも知れぬ。行き違ひになると詰らねえ。先へ行かう。旅宿で會ふだらうから。」と、エフイムは考へた。村へ着くと、彼はこれくの老人が來たら、私の宿へ案内して貰ひたいと十人頭に頼んで置いた。が、エリセイは旅宿へも來なかつた。エフイムは更に先へ旅を續けた。そして頭の禿げた老人を見なかつたかと皆に訊いた。が、誰も見た者はなかつた。エフイムは不思議に思ひ乍らも、なほ一人で旅を續けた。「オデッサか、或は船の中かで會

ふだらう。」と、彼は考へて、最うエリセイのことを心配するのを止めた。

エフイムは途中で一人の旅人に會つた。それは僧帽と僧服とを着け、頭髪を長くした人で、アフォンには行つたことがあるので、此度はエルサレムへ行くのだと言つてゐた。エフイムは旅宿で此の人に逢つて心易くなつたので、それからは二人一緒に旅をするやうになつた。

二人は無事にオデッサへ着いた。そして其處で三晝夜ばかり船を待つてゐた。大勢の巡禮も待つてゐた。皆、諸國から集まつたものであつた。エフイムはこゝでもエリセイのことを訊いたが、誰も見た者はなかつた。

エフイムは外國旅行券を買つた——それに五留取られた。其上に彼は往

復の船賃として四十留拂つた。而して旅行中に必要な麵麴や餅なども買込んだ。船は荷厄をした。巡禮達は船へ運ばれた。タラスイッチも旅行者と一緒に船へ乗り込んだ。船は錨を抜き、陸地を離れて海へ出た。其の日は良い航海であつたが、晩方から風が起り、雨が降り出して船は揺れて、甲板は波に洗はれた。人々は騒ぎ出し女達は喚き始めた。男の中にも意氣地の無い者は、船ちうを驅け廻つて遁れ場を捜し始めた。エフィームも可成恐ろしかつたが、その恐怖を顔に現さずに、船に乗り込んだ時から場處取つてゐた甲板にタムポフの老人達と一緒に坐つてゐた。其の晩夜通しと、其の翌る日一日とをさうして坐つてゐた。皆自分々の袋に獅噛み附いたまゝ何にも言はなかつた

三日目に暴風雨は静まつた。五日目に船はコンスタンチノーポールへ着いた。或る旅人達は上陸して、今では土耳其人の手に屬してゐる聖ソフィヤの寺を見物に行つた。が、タラスイッチは上陸もせずに、船に留つてゐた。そしてただ白い圓麵麴を買つただけであつた。船は幾晝夜か其處に停泊して、再た海へ乗り出し、なほスミルナ市やアレクサンドリヤ市などへも寄航して無事にヤフファ市へ着いた。ヤフファで巡禮達は皆船から下りることになつてゐた。ヤフファからエルサレムまで七十露里ばかり歩けばいゝのである。で、愈上陸する段になると、乗客達は驚いた。高い船から舢舨へと飛び下りなければならぬのだが、舢舨が揺れてゐるので、餘程巧くやらないと海へ陥る

恐があつた。現に二人も海へ落ちてぐいよ濡になつた。が、先づ皆無事に上陸した。上陸すると、皆徒歩で旅をし、三日目のお晝頃エルサレムへ着いた。一同は市外にある露西亞の旅宿へ入り、其處で旅行券の検査を受けたり、晝飯をしたりして旅行者と一緒に聖地参拜に出かけた。けれども基督の墓へはまだ参ることを許されなかつたので、参拜者達は皆なパトリアルフ修道院へ集まつた。此處では男女別々にゐなければならなかつた。参拜者達は履物を取脱いで、圓く輪形に坐るやうに命じられた。すると一人の修道士が手拭を持つて出て来て、皆の足を洗ひ始めた。彼は皆の足を順々に洗つて拭いて接吻をした。エフィームも足を拭かれて接吻された。参拜者達は晩禱にも朝禱に

も参拜して、祈つたり、お蠟燭を上げたり、親類縁者の事をも祈願したりした。此處では参拜者達に食事を與へ葡萄酒を飲ませたりした。朝になると一同は、エジプトのマリヤが救はれたと云ふ庵へ行つた。皆お蠟燭を上げ、感謝の祈禱をした。其處からアブラハム修道院へ行つた。またサヴェークの園をも見た。其處でアブラハムは自分の息子を神の爲めに刺し殺さうとしたのである。それから基督がマグダレナのマリヤに現れた處へ行き、なほ主の兄弟ヤコブの會堂へも行つた。何處へ行くにも皆、伴侶の旅人の案内である。その旅人は何處では幾ら金錢を拂はなければならぬといふ事を行く先々で教へた。晝頃一同は旅宿へ歸つて食事をした。皆が床に就くと、伴侶の旅人は不意に起き

上り、自分の衣服を拂つたりして喚き始めた。彼は二十三留入つてゐる財布を盗まれたのだと言つた。その財布には十留紙幣が二枚と、三留の小錢とが入つてゐたのだと云ふのである。旅人は頻りに愚痴を零してゐたが、何うにも爲やうがなかつた——皆、床に就いた。

## 九

エフィームも床に就いたが、彼にはいろんな誘惑が襲ひかゝつた。「誰が彼奴の金錢を盗るものか。彼奴にはもとから金錢が無かつたんだ。彼奴は何處で

も金錢を拂つたことはありやしない。俺に拂はせて置いて、自分で拂ひはしなかつた。その上、俺からは一留も借りやがつて。」と、エフィームは考へた。

エフィームは斯んな事を思つては善くないと自分でも思つた。「何うして俺は他人を悪く思ふのだらう。これでは反つて自分が罪を作る事になる。最う考へまい。」と、彼は獨語つた。が、一寸忘れると、再た何と云ふ愁の深い奴だらうとか、彼奴が財布を盗られたとわめいた時の顔附が如何にも故意とらしかつたなど、考へ始めた。「彼奴には金錢は無かつたんだ。あれが手なんだ。」と、エフィームは考へた。

皆は晩方に床を離れて復活の聖堂——主の墓へ出かけ、其處で行はれる聖



餐式さんしきに列つらなることになつた。旅人たびとは絶えずエフィームエフィームに附つき纏まとつてみた。大聖堂だいせいどうへ着ついた。其處そこには大勢たいせいの人々ひとが——露西亞人ろしあじんや、他國たこくの人々ひとや、ギリシヤ人じんや、アルメニヤ人じんや、土耳古人とるこじんや、シリヤ人じんなどの巡禮じゆんれいが——集あつまつてゐた。エフィームは群衆ぐんしゆと一緒に聖門せいもんへ來た。と、一人ひとりの修道士しゆだうしが人々ひとをつてゐた。彼は土耳古人とるこじんの番人ばんにんの傍そばを通とほつて、救主きうしゆが十字架じゆじかから下くだろされて案内あんないした。彼は土耳古人とるこじんの番人ばんにんの傍そばを通とほつて、救主きうしゆが十字架じゆじかから下くだろされて膏あぶらを塗ぬられたと云ふ處ところへ人々ひとを導みびいた。其處そこには九ここのつの大燭臺だいじやくたいが點火てんかされてゐた。案内者あんないしやは種々いろいろな物ものを見せて説明せつめいした。エフィームは其處そこでお蠟燭ろうそくを立てた。次に修道士しゆだうし達はエフィームを右手みぎての方ほうへ案内あんないし、階段かいでんを上のぼつて、十字架じゆじかが立てられたゴルゴタゴルゴタの山やまへ伴つれて行いつた。エフィームは其處そこで祈いのりを獻いげた。次つぎ

に彼は地ちの底そこまで通つうじてゐると云ふ穴あなを見みせられた。次つぎに基督キリストの手てと足あしとが十字架じゆじかに釘くぎ附つけにされた場處ばしよを見みせられた。次つぎに基督キリストの血ちがアダムの骨ほねに注そそがれたと云ふアダムの墓はかを見みせられた。次つぎに基督キリストが刺いばらの冠かんむりを被かぶせられる時に腰掛こしかけたと云ふ石いしの傍そばへ伴つれて行いかれた。次つぎに基督キリストを鞭打むちうちつ時に彼かれを縛しばりつけたと云ふ柱はしらの傍そばへ案内あんないされた。次つぎにエフィームは基督キリストの足跡あしあとと言いはれてゐる二つの穴あなのある石いしを見みた。修道士しゆだうし達はまだ何かを見みせようとしたが、人々ひとは先まを急いそいで、主しゆの柩ひつぎが置おかれたといふ空洞くわうくわへ押おし寄よせて行いつた。其處そこでは他派たはの聖餐式せいさんしきが終はつて、正教派せいけうはの聖餐式せいさんしきが始はまつた。エフィームは人々ひとと共に空くわ洞くわうへ行いつた。

彼は何うかして件の旅人から離れたいと思つた。と云ふのは、彼は腹の中  
 で、旅人に對して罪を作りつけてゐたからである。けれども旅人は彼から  
 離れずに、主の墓の聖餐式にまでも一緒に隨つて來た。二人はもつと前へ出  
 ようとしたが、さうは出来なかつた。ひどくこみ合つてゐるので、前へも後  
 へも一歩でも動くことが出来なかつた。エフィムは立つたまゝ前方を見て祈  
 つてゐたが、絶えず自分の財布の事が氣になつた。彼は二つのことを考へて  
 ゐた、一つは旅人が自分に嘘を言つたのだと云ふ事、一つは若し旅人が嘘を  
 言つたのでなくて、本當に財布を盗られたのなら、或は自分もそんな目に會  
 はないものでもない」と云ふ事であつた。

## +

95  
 斯うしてエフィムは立つて、お祈り上げながら、主の柩の置かれた處に建  
 つてゐる正面の御堂を見てゐた。柩の上には三十六の燈明が點つてゐる。人  
 人の頭越にエフィムがそれを見てゐると、何と云ふ不思議なことだらう！燈  
 明の眞下で、一番前の恩籠の灯が點つてある處に、灰色の上衣を着た老人が  
 立つてゐる。そして丁度エリセイ・ポドゥロフのやうに頭ちうが禿げて光つ  
 てゐる。「エリセイに似てゐるなア。」と、エフィムは思つた。「いや、そんな筈

はない！エリセイが俺より先に來てゐる筈はない。俺が乗つて來た前の船は一週間前に出帆したのだ。彼が先に來る筈はない。俺達が乗つて來た船にはあなかつた。俺は巡禮衆を殘らず見て歩いただて。」

エフイムが斯んな事を考へてゐるうちに、老人はお祈りを始めて、三度禮拜をした。一度は前を向いて神に禮拜をし、次に左右に向いて正教の信者達に禮拜をした。老人が右の方へ頭を向けた時に、エフイムは彼をよく見た。たしかに違ひない。ポドロッフに違ひ無い。黒味が、つて縮れた願鬚と云ひ、頬の白毛といひ、眉といひ、眼といひ、鼻といひ、全體の顔立と云ひ、紛れもなくエリセイである。確かに彼はエリセイ・ポドロッフである。

エフイムは伴侶を見附けたことを喜ぶと同時に、エリセイが何うして自分より先に來たかと云ふことを怪しんだ。

「それにしてもポドロッフは随分前に出てゐるな。」と、エフイムは考へた。「あゝ云ふ男だから誰か、彼處へ伴れて行つたものと見える。さうだ、出口で會つて、この僧帽を被つた旅人をまいて、エリセイと一緒になる事にしよう。

エリセイが前の方へ俺の席も世話して呉れるだらう。」

エフイムはエリセイを見送さないやうにと打成つてゐた。聖餐式が済むと群集はどやくと動き出し、お互に押し合ひながら、十字架に接吻しようとしてエフイムの方へ押し寄せて來た。彼は再た財布を盗まればしまいかと心

配し始めた。エフィームは片手で財布を抑へながら広い處へ出ようと群衆の間を押し分けた。広い處へ出て、あちこちと歩き廻つてエリセイを捜した。聖堂の中の宿房には何れにも、各國人が大勢ゐて、食べたり、飲んだり、寝轉んだり、本を讀んだりしてゐた。が、エリセイは何處にもゐない。旅宿に歸つて来たが、そこにもゐなかつた。其の晩件の旅人は歸つて來なかつた。彼は行方を昏ましたのである。エフィームの貸した一留はとう／＼返さず了ひになつた。エフィームはたゞ一人になつて了つた。

翌る日、エフィームは再た主の墓へ參詣した。その時は同じ船に乗つて來たタムポフの一老人と一緒にあつた。彼は前の方へ進み出ようとしたが、推返

されて了つて、柱の傍で祈禱をした。前の方を見ると、また燈明の眞下の、主の墓の傍の高壇の上にエリセイが立つてゐた。祭壇の傍の司祭かなぞのやうに両手を擴げて禿頭を光らしてゐた。

「よし」と、エフィームは考へた。「今度こそは見失はないぞ。」彼は人を押し分けて前の方へ出た。其處へ行つて見ると——エリセイはゐない。何處かへ席を變へたらしい。三日目にも矢張エリセイは一番神聖な場處にそして一番人目を惹く處に立つて、両手を擴げ、何か上にある者を見てゝもゐるやうに仰向いてゐた。禿頭は前よりも一層光つてゐた。「よし」と、エフィームは考へた。「今日こそきつと捕へよう。先に出口に出てゐよう、彼處に居りや決して見失

ふことはない。」エフイムは出口へ出て殆んど半日も立ち盡してゐた。人々は皆出て了つたが、併しエリセイは見附からなかつた。

エフイムはエルサレムに六週間滞在しあらゆる處へ参拜した。ベツレヘムにも行けば、ヴィファニヤへも行き、ヨルダン河へも行つた。主の墓では自分が葬られる時に着せて貰ふ爲めの新しい襯衣に判を捺して貰つた。ヨルダン河の水を罎に詰めて來た。聖地の土や、恩寵の火が點つてゐた蠟燭などを持つて來た。祈禱の時に記憶して貰ふやうに八ヶ所に名前を書き附けたりして家へ歸る旅費だけ残して皆費ひ果した。そして歸途に就いた。ヤフファから船に乗つてオデッサに着き、其處から徒歩で家へと向つた。

十一

エフイムは一人で前來た路を歸つて來た。彼は家に近づくに従つて、再た自分の留守に家の者達が何んな暮方をしてゐたらうと云ふ心配に襲はれた。

「二年のうちにや種々の事があるものだ。」と、エフイムは考へた。「一身上拵へるにや一生涯かゝるが身上を潰す事ア譯はない。」自分の留守に息子が何んな風に仕事をしたか、春を何う云ふ風に迎へたか、家畜は何う云ふ風に冬籠りをしたか、小屋は言ひ附けて置いた通りに建てられたかなど、彼は心配を

した。そのうちに彼は去年エリセイと別れた土地へ着いた。人々は去年の飢饉を忘れてゐた。去年の苦しみに引換へ、今は最う何不自由なく暮してゐる。收穫がよかつたので、すつかり恢復して、過ぎ去つた苦痛も悉く忘れてゐる。或る夕エフィムは去年エリセイに紛れた村へ来た。村のとツツきの百姓家の中から白い襦袢を着た女の子が駆け出して来た。

「お爺さん、お爺さん！私の家へ寄つて下さいー」

エフィムは行き過ぎようとしたが、女の子は彼を止め、衣服の裾を掴んで笑ひ乍ら家へ引つ張り込んだ。

女房も男の子と一緒に上り段へ出て来てエフィムを招いた。「何卒お爺さ

ん、家へ寄つて夕飯を食べて行つてお呉れ——泊つて行つてお呉れ。」と言ふ。エフィムは入つて行つた。「序にエリセイのことを訊いて見よう」と、彼は考へた。「エリセイがあゝの時、水を飲みに寄つたのは確かに此の家だつた。」エフィムが家へ入ると、家婦は彼の肩から袋を下してやり、足洗を汲んでやつて、而して食卓に坐らせた。それから牛乳を持つて来たり、肉餛飩や粥などを運んで来たりした。タラスイッチは御禮を言ひ、その旅の者に對する親切を賞めた。と、女は頭を振つた。

「私等は旅のお方に親切にせんではずまんでな。」と、女は言つた。「私共がかうして生きてられるといふのも或る旅のお方のお蔭ですもの。私共は神様を

忘れて暮してゐたので、お罰に逢つて、皆最う死ぬのを待つばかりの難儀になつたで。去年の夏、私共は皆、食物が無いので倒れて了ひ、おまけに病氣にまで罹つてねえ、最う死ぬより外に仕方がなかつたので御座んすよ、所が神様は私共に丁度あなたのやうな一人の老人をお遣はしになりましたな、その方はお晝時分に水を飲みにお寄りなすつたんだが、私共を可哀想に思つて、私許へ暫く逗留になりましたな。そして私共に飲ませたり、食べさせたりして、私共の身體を丈夫にして下さつた上に、手放した土地を買ひ戻し、馬や車まで買つて而して此處をお發ちなされたで御座んすよ。」

そこへ老婆も入つて来て、家婦の話をひきとつた。

「俺達はある方が人だか神様の御使だかいまだに分りましねえで」と、老婆は言つた。「其のお方は、俺達を可愛がつて、いろいろ面倒を見て下さつたが、名前も言はずに發つて了ひなされたで、俺達は誰の爲めに神様に祈つていか分らねえで御座んす。今でも眼の前に見えるやうですが、俺が横になつて死ぬのを待つてゐると、一人の年寄が入つて來ましたよ。偉さうな人ではないが、頭の禿げた人で——はい、水を飲みに來ただ。其の時この罪深い俺は、何しに來たんだと小うるさく思つただがな。所がその人はまあ！俺達を見ると、直ぐに傍へ袋を——それ其處んどこへ下して、其口を解いただあ。」

「さうぢやないよ、お婆さん」と、其の時女の子が口を挟んだ。「あの人は最

初此處に、小屋の真中に袋を下して、それから寝棚の上へ上げたんだよ。」

二人は彼が何處で仕事をし、何處で眠り、何んな事を爲、誰に何んな事を言つたかと云ふことでお互に争ひながら彼の言葉と彼の爲た事とを話して聞かせた。

夜になると主人の百姓も馬に乗つて歸つて来て、矢張りエリセイが彼等の所で何んな事をしたかを物語り始めた。

『あの方が来て下さらなけりや。』と、主人は言つた。『俺達は皆、罪を有つたまゝ死ぬところだつたがす。俺達はすつかり失望して神様や人様達を怨みながらおつ死ぬとこでがした。けれども彼の方は俺達を助けて下さつたばかりでしただ。』

りでなく、あの方を通して俺達は神様を知り、有がたい人の情といふものを信ずるやうになりましたで。みんなあの方のお蔭でがす。俺達は以前には畜生のやうな暮し方をしてゐましたが、あの方のお蔭でやつと人間らしくなりましただ。』

一家の人達はエフイムに御馳走をしたり、飲ませたり、床に就かせたりして自分達も寢床へ入つた。

エフイムは床には就いたが眠れなかつた。そしてエルサレムでエリセイが高壇に立つてゐるのを三度も見たことを頻りに考へてゐた。

「さうすれば矢張り彼の男は俺より先に行つたんだ」と、エフイムは考へ



た。「俺の爲た事は神様から取り上げられるか何うか分らないが、彼の爲た事は確かに神様の御氣に入つたのだ。」

朝になると、一家の人達はエフイムに別れを告げた。路で食べるやうに饅頭を袋に入れて呉れた。そして自分達の仕事に出かけた。エフイムは旅路を續けた。

## 十二

エフイムの旅は丁度一年かゝつた。彼が家へ戻つた時は春であつた。

彼は晩方に家へ着いた。息子は家にゐなかつた。居酒屋へ行つてゐたのである。飲だくれて歸つて来た息子をつかまへて、エフイムは種々な事を訊き始めた。エフイムは息子が留守中にさんく道樂してゐたことを知つた。金銭は皆使つて了ふし、仕事はほつたらかしておいたのである。エフイムが叱ると、息子は大口を叩いた。

『そんならお前が自分でやりやよかつたんぢや無えか』と、彼は言つた。『お前さんだつて旅に出て金銭を皆費つちまつたぢや無えか、俺ばかり叱るつて法は無えや!』

老人は非常に腹を立て、息子を殴つた。

翌る朝、エフイム・タラスイッチは息子について相談する爲めに村長の許へ出かけた。そして其の途中エリセイの屋敷の傍を通つた。と、エリセイの許の婆さんが上り段に立つてゐて挨拶をした。

「今日はお爺さん、お壯健で旅をしておいでたかね？」と、婆さんは言つた。

エフイム・タラスイッチは立ち止つた。

「お蔭で行つて来ましたよ。」と、エフイムは言つた。「だが、お前さん許のお爺さんに紛れてしまつてなう。聞けば最う歸つて御座るさうぢやの。」

婆さんは語り出した。此の婆さんはおしやべりであつた。

「歸りましたとも、」と、婆さんは言つた。「お前さま、もうずつと前に歸りま

したよ。昇天祭が済んで間もなくな。神様がお爺さんを歸して下さつたので、俺達は最う喜んで居りますだよ。お爺さんがゐないと淋しうてなア。もう年がよつてゐるで、あの人が居つたからつて格別仕事の足しにもなりはし無えか矢張り家の大將だで、家に居りさへすれば家ちうが賑やかだでな。息子も本當に喜こんだよ。お爺さんがゐないと、御日様が出ないやうだつてな。ほんとにお前さん、あの人がゐないと家が淋しうてな、家中が皆なお爺さんを慕つてゐますだよ。」

「では、今、お爺さんは家かね？」

「家に居りますとも、蜂小屋で蜂の群を集めて居りますだよ。何でも今年には蜂

の當り年で、神様のお蔭でお爺さんが今迄見たことがない程蜂が健いさうでがすよ。神様が思つたより良くして下さるでな。さアお前さん、入らつしやい。お爺さんが喜ぶだらうで。」

エフィームは玄關を通り、庭を通つて蜂小屋にゐるエリセイのところへ行つた。蜂小屋へ入つて見ると、エリセイは顔覆も手袋も着けずに灰色の上衣を着て樺の木の下に立つてゐた。そして両手を擴げて空を仰いでゐた。彼の頭ぢうの禿は、彼がエルサレムの主の墓の側に居つた時と同じやうに光つてゐた。それからまた、エルサレムで見た時と同じく、彼の頭上には樺の枝を透して燈明の代りに太陽が輝やいてゐた。彼の頭の周圍には金色をした蜜蜂が

無數に飛び廻つてゐたが、彼を刺さなかつた。エフィームは立ち止つた。

エリセイの所の老婆は亭主に聲をかけた。

『エフィームさんが見えたによ！』

エリセイは振向いて、大そう喜んで、エフィームを迎へた。徐かに願鬚の中から蜂を追ひ出しながら、

『お壯健だつたかの、お前さん、道中別に變りがなかつたかの？』

『まア行く丈は行つて來ましたよ。お前さんにもヨルダン河の水を持つて來た。取りに來さつしやい。だが神様が俺の骨折りをお受け下さつたか何うかはな？……』

## 二老人

「何事も神様のお蔭だでの、基督様の御救ひを待つばかりだでの。」

エフイームは暫時黙つてゐた。

「俺は足では行つて来たどが、靈魂で行つたか何うかはな……」

「神様にお任せなさるがよいだ、お前さん、神様に御任せなさる。」

「俺は歸り路にお前さんが寄つた百姓の家に寄つて来たどよ……」

エリセイは屹驚してどぎまぎした。

「何も皆神様の御旨だでな、お前さん、神様の御旨だ。何うだな一寸寄つて

一休み——蜂蜜でも御馳走ませうわい。」

エリセイは話をそらして家事向きの事を語り始めた。

## 二老人

エフイームは溜息を吐いた。そして百姓屋の人達のことや、エルサレムで彼を見たことはエリセイに言はなかつた。彼は神が凡ての人々に此の世に生きてゐる間に愛と善行とで自分の罪障を贖ふやうにと命じたのであることを覺つた。

|| 附 篇 ||

(一) 女の子は老人より伶俐である

117  
春のはじめの復活週間であつた。人々はまだ橋で乗り廻つてゐた。戸外は一面の雪で、村の彼方此方に小川が流れてゐた。二つの屋敷の間の小路にも大きな水溜が肥料の下から流れ出てゐた。此の水溜に兩方の屋敷から二人の女の子が寄つて來た。一人は少し年下で、一人は少し年上であつた。二人共母親から新らしい上衣を着せられてゐた。丁度祈禱が済んだ後なので、二人

は水溜の傍へ出て、お互に自分の晴衣を見せ合つた。そして遊び始めた。二人は水の中へ入つて見たくなつた。で、小さい方は靴を穿いたまゝ入らうとした。すると大きい方は「マラーシカ、お入りでないよ、お母さんに叱られてよ、私は今、靴を脱ぐわ、お前もお脱ぎよ」と言つた。二人の女の子は靴を脱ぎ、衣服をたくし上げて両方から水溜を渡り始めた。マラーシカは蹠まで入つて言つた。「深いわ、アクリューシカ——私、怖いわ。」「大丈夫よ」と、アクリューシカは言つた。「もう深くないわ。真直に私の方へいらつしやい」二人は次第に近づき始めた。アクリューシカは言つた「マラーシカ、よく氣を付けて水を澄かさないうちに静かにおいでよ。」アクリューシカが斯う言ふか言はないに

マラーシカは片足を強く水の中へ入れたのでアクリューシカの上衣にバツと水がかゝつた。上衣ばかりではなく、鼻や眼にも潑ねかゝつた。アクリューシカは上衣に汚點が出来たのを見てひどく腹を立て、マラーシカを罵りながら、駈け寄つて打たうとした。マラーシカは悪いことを爲たと氣が付くと、吃驚して水溜を出るなり家の方へ駈けて行つた。丁度其處へ通りかゝつたアクリューシカの母親は、娘の上衣が濡れ、下衣が汚れてゐるのを見た。「馬鹿、何處でお前は汚したんだ？」「マラーシカが故意と私に水をかけたんだもの。」アクリューシカの母親は、マラーシカを掴んで其の頭を打つた。マラーシカは大聲を上げて泣き出した。で、こんどはマラーシカの母親が出て來た。「何うして私の

娘を打つんだ？」と、彼女は隣の内儀を罵り始めた。賣言葉に買言葉で、二人の内儀は悪體の吐き合ひを始めた。しまひには主人達も飛び出して来て、街道に一ぱいになった。皆、怒鳴り合ふだけで、誰も相手の言葉に耳を假さなかつた。斯うして互に怒鳴り合つてゐるうち、一人が一人を衝いたのをきつかけに、すつかり殴り合ひの喧嘩になつて了つた。其處へアクリリカの祖母さんが出て来た。祖母さんは百姓達の間へ入つて皆を宥め始めた。「何うしたんだね、お前さん達は。今日は喜ばなけりやならない日なのに、お前さん達は罪を作つてるぢやないか。」けれども皆な祖母さんの言葉を聞かなかつた。そして祖母さんはもう少しで衝き倒されるところであつた。で、若しアク

リリカとマラーシカとがゐなければ祖母さんは遂に百姓達を説き鎮めることが出来なかつたであらう。兩方の内儀が罵り合つてゐるうちに、アクリリカは自分の上衣を拭いてまた小路の水溜へ出て来た。彼女は小石を拾つて、水を街道の方へ流してやるやうに水溜の傍の土を掘り始めた。彼女が土を掘つてゐる間に、マラーシカも其處へやつて来てアクリリカに手傳をし、矢張り木片で溝を掘り始めた。百姓達が殴り合ひを始めた時には、娘達の溝の中を水が街道の方へ流れてゐた。丁度祖母さんが百姓達を仲裁してゐた方へ流れてゐた。二人の女の子は溝を挟んで睨け廻つてゐた。「お止よ、マラーシカ、お止よ！」と、アクリリカは叫んだ。マラーシカも矢張り何か言はうと

したが、何にも言へない程笑ひこけてゐた。

斯うして二人の女の子は駈け廻つたり、木片が流れるのを見て笑つたりしながら丁度百姓達の真中へ駈け込んだ。祖母さんは二人の娘を見て百姓達に言つた。「お前さん達も少しは神様を恐れたら何うだえ？ お前さん達は此の娘達の爲めに喧嘩をしてゐるんだが、二人は最う先刻から何も彼も忘れて了つて——また仲好く遊んでゐる。娘達の方がお前さん達より餘程惻口だ！」百姓達は二人の娘を見ると恥かしくなつた。が、やがて自分で自分が可笑くなつて、それ／＼自分の家へ引き上げた。

「爾等、小兒の如くならずんば神の國に入るを得ず。」

### (二) 惡魔に依る者は脆く

#### 神に依る者は強し

123  
ずつと昔一人の善良な人があつた。此の人は種々な物を澤山有つてゐて其上、多くの奴僕も使つてゐた。奴僕達は自分の主人を讃めて「此の世の中に俺達の主人より良い主人はねえぜ。甘い物は食はせる、御仕着せも行き届いて、仕事も力相當な事をさせて下さるし、誰にも惡態を吐いたりなさらねえし、誰をも憎むやうな事をなさらねえだ。他所の主人達が自分の奴僕を牛や



馬より酷え目に逢はしたり、罪も無えのに罰したり、邪慳にこきつかつたりするのたア全然違ふ。俺達の主人は俺達の爲善かれと御心にかけて何でも俺達に善くして下さる、而して俺達を丁寧にお取扱ひなさる。俺達は最うこれ以上の幸福は無えといふもんだ。」と言つてゐた。

斯んな風に奴僕達は自分の主人を讃めてゐた。所が悪魔は奴僕達がかくその主人を愛して幸福に暮してゐるのを妬ましく思ひ始めた。で、悪魔は、此の奴僕達の中のアレーブと云ふ男を自分の手につけた。而して彼に他の奴僕達を誘惑すようにと言ひ附けた。或時、奴僕達が休息して主人を讃めてゐた時に、アレーブは大聲に言つた。「兄弟衆、お前達はな、俺達の主人を善い人

だと云つて讃めてるが、そりやア間違えたよ。悪魔に取り入るがよいだ。悪魔も善い者にならア。俺達は主人に善く仕へて、何事によらず主人の氣に入らうとしてゐるのに、主人は俺達が主人の腹を見抜かうとしてゐるんだと考へてゐるだ。何うして彼奴は俺達と一緒に善い人間になれねえのかなア？だから彼奴に氣に入るやうに爲るのを止して彼奴を憎んで見ろよ、彼奴は他の主人達のやうになつて、一番悪い主人達よりもつと悪い事をして、悪い事の讐いをするべえよ。」で、他の奴僕達はアレーブと口論を始めた。その揚句賭をするこゝになつた。アレーブは善良な主人を怒らせることが出来ると主張した。そして若し彼が主人を怒らせることが出来なければ、自分の晴衣を差出す、

若し怒らせたなら皆それらの晴衣をアレーブに渡すと約束した。それからなほ皆が、若し彼が挫措に繋がれるか、牢屋へ入れられるかした場合には、彼の爲めに主人に辯解して、救つてやると云ふ約束をもした。さて、アレーブは翌る朝、主人を怒らせる事を誓つた。

アレーブは、主人の羊小舎で、乳を搾る爲の大切な山羊の番をしてゐた。朝になつて、善良な主人が客人達と共に羊小舎に来て客人達に自分の秘蔵の山羊を見せ始めた時、悪魔の僕は、さア見ろ、今直ぐに主人を怒らせるぞと言ふ風に仲間の奴僕達に囁いた。奴僕達は皆、集つて扉口から覗いたり、柵越しに見たりしてゐた。悪魔は樹へ上つて自分の僕が何う云ふ風に仕事をす

るか庭の中を見てゐた。主人は庭の中を歩き廻つてお客達に羊や羔などを見せて、次に自分の一番大切にしている山羊を見せようとした。『他のも皆立派なものですかね』と、主人は言つた。『あの角のぐるりと巻いた奴は値段知らずちふ奴で、あれは俺にとつて眼よりも大事なのでが。』が、羊も山羊も大勢の人に驚いて庭の中を駆け廻るので、客人達は其の大切な山羊をよく見るこゝとが出来なかつた。漸くその山羊が立ち止つたと思ふと、悪魔の僕は何知らぬ顔で羊を吃驚させたので、再た皆、騒ぎ初めた。客人達はどれがその値段知らずの山羊であるか見分けることが出来なかつた。主人は氣を焦立たせて言つた。『おい、アレーブ、面倒で済まんが、一つあの角の巻いた山羊を捉ま

へて呉れまいか。氣を附けてな。』主人が斯う云ふとアレーブは直ぐに獅子のやうに山羊の群の中へ飛び込んでその値段知らずの山羊の鬘を掴んだ。鬘を掴むと、すぐに彼は一方の手で左の後脚の一つを握つてさしあげ、主人の眼の前でその脚をぐいと上へ衝きあげた。と、その脚は若い菩提樹のやうにほきと折れた。アレーブは大事な山羊の片脚を膝の少し下から折つて了つたのである。山羊はメイ／＼と鳴き乍ら前膝を衝いて倒れた。アレーブが右の片脚を持つと、左の片脚はだらりと鞭のやうに垂れてゐた。お客達も奴僕達も皆なアツと聲を發てた。悪魔はアレーブが、自分の仕事をうまく遣つて退けたのを見て喜こんだ。が、主人の顔色は夜よりも暗くなつた。彼は顔を顰め

頭を垂れたまゝ何とも言はなかつた。お客達も奴僕達も黙つてゐた……そして何うなる事かと成行を見てゐた。主人は暫時黙つてゐたが、やがて自分から何か振り落さうとでもするやうにぶる／＼と身振をして頭を擡げ、眼を天に向けた。彼がほんの暫時さうして天を見てゐるうちに、顔の皺は消えて了つた。彼は莞爾として眼をアレーブに向けた。彼は暫時アレーブを打成つてから、再び莞爾として言つた。「あゝ、アレーブ、アレーブ！お前の主人がお前に俺を怒らせるやうに言ひ附けたのだ。けれどもお前の主人より俺の主人の方が強い。お前は俺を怒らせなかつたが、俺はお前の主人を怒らせてやらう。お前は俺に罰せられることを怖れてゐるが、アレーブよ、俺はお前を

自由にしてやりたいのだ。だからお前は俺から罰せられるやうなことはない。お前は自由になりたがつてゐるから、俺はお客達の前でお前を自由にやらう。何處でも好きなところへ行け、そして自分の晴衣を持つて行け。』  
 斯う言つて善良な主人は自分のお客達と一緒に家へ入つた。悪魔は齒をがたく／＼させながら樹から下りて地の中へ隠れて了つた。

### (三) 人の兄弟と黄金

昔エルサレムの近くに二人の兄弟が住んでゐた。兄はアファナシイと云ひ弟はイオアンと呼んだ。二人は街の近くの山中に住ひ、人々の施物で生命を繋いでゐた。兄弟は毎日労働してゐたが、それも自分の爲めの仕事ではなくして貧者の爲めに働らいてゐたのであつた。労働に苦しんでゐる者や、病人や孤兒や寡婦などを見ると、兄弟は其處へ行つて働いて遣つた。そして賃金も貰はずに歸るのであつた。斯うして兄弟は一週間離れ／＼に働らいて、

たゞ土曜日の晩にだけ自分達の住家で落合つた。それから日曜日にも二人は家に居て祈禱をしたり、談話をしたりしてゐた。神の使も二人の集會に臨んで彼等を祝福するのであつた。で、月曜日になると二人は各自の方面に別れて行くと言ふ、かうした生活を兄弟は長い年月の間續けてゐた。神の使は毎週彼等の集會に臨んで彼等を祝福してゐた。

或る月曜日のこと、兄弟は勞働に出かけ、各自の方面へ別れて行かうとする時、兄のアファナシイは愛する弟と別れるのが悲しくなつた。で、彼は足を止めて後を振り返つた。イオアンは頭を垂れて、自分の方角へ歩いて行きながら後を見返りもしなかつた。が、俄かにイオアンも立止つた。そして何

か眼に止つた物でもあるやうに兩手を翳して彼方を眺め始めた。やがてその、自分が見た物の方へ近づくと、俄かに飛び退いて、丁度猛獸にでも追はれたやうに傍目もふらず、駆け出して山の麓の方へ行き、更に峯の方へと駆け上つた。アファナシイも驚ろいてその場處へ引返して見た。次第に近づいて見ると——何か日の光に輝いてゐる物がある。で、更に近づいて見ると——草の上に黄金が堆く積まれてゐた。アファナシイは、黄金と、弟が飛び退いた事になほ一層驚いた。

「弟は何に驚ろいたのだらう、何うして弟は逃げ出したのだらう？」と、アファナシイは考へた。「黄金に罪があるのではない、罪は人間にあるのだ。黄

金によつて、人は悪事を爲ることも出来、善事を爲ることも出来る。此の黄金によつて、幾人の孤兒と寡婦とを養ふことが出来るか知れない、幾人の裸體の人に衣服を着せることが出来るか知れない、幾人の不具者と病める者を癒すことが出来るか知れない！自分達二人は今人々の爲めに働いてゐるが、力が足りない爲めに其の働きも小さい。自分達が此の黄金を所有すればもつとく人々の爲めに盡すことが出来るのだ。」アファナシイは斯の考を弟に話したいと思つた。が、イオアンは最う呼んでも聞えない程遠く逃げて了つて、たゞ向うの山に甲蟲のやうに見えてゐるだけであつた。

で、アファナシイは自分の衣服を脱ぎ、その中へ持つて行けるだけ黄金を

掻き込み、肩に昇いで街へ持つて行つた。彼は或る宿屋へ行くと、其處の主人に黄金を預けて、更に後に遣つてゐるのを取りに行つた。而して悉皆運んで了ふと、今度は商人の所へ行つて街の中に或る土地を購ひ、石材と木材とを買ひ、労働者を備つて家を建て始めた。三ヶ月の後、彼は街に三軒の家を建てた。一軒は孤兒と寡婦とを收容する所、一軒は病人と不具者とを收容する病院で、も一軒は旅行者と貧困者とを泊らせる宿屋であつた。なほアファナシイは三人の敬虔な老人を見附けて、一人に收容所の取締をさせ、一人を院長にし、も一人を宿屋の主人とした。けれどもまた三千の金貨が残つてゐた。で、彼はそれを千個宛三人の老人に別けて遣つて、貧乏人達にそれを分配す

るやうに言ひ附けた。三軒の家は孰も人で一ぱいになつた。人々はアファナシイを讃め始めた、アファナシイはこれを喜んで最う街から出たくなくなつたが、彼はその弟を愛してゐたので、人々に別れを告げ、銀一文も持たず、着て来た古い衣服を着て山の住家へと歸つた。

アファナシイは山に近づきながら考へた、「弟の考へ方は間違つてゐる、何にも黄金から飛び退いたり、逃げ出したりしなくてもいいのだ。俺の爲た事は決して悪い事ぢやない。」

アファナシイは斯う考へた刹那に、偶と前を見ると——前方の路の上に兄弟を祝福した神使が立つて恐ろしい眼附でアファナシイを睨んでゐた。アファ

ナシイは眞蒼になつて、「主よ、何で御座いますか？」とやつとこれだけ言つた。と、神使は言つた「此處を去れ。爾は爾の弟と共に生活するに當らざる者である。爾の弟が黄金より飛び退いた事は、爾が爾の黄金を以て行つた凡ゆる事よりも尊いものであるといふことを知らざるか！」

で、アファナシイは自分が幾人の貧困者と旅客とを養ひ、幾人の孤兒を助けたかと云ふことを語らうとした。と、神の使は彼に言つた。「爾を誘ふ爲めに彼の黄金を置きたる悪魔が爾に此の言葉を教へたのであらう。」

アファナシイは良心の苛責を感じた。彼は自分の爲た事が、すべて神の爲めでなかつた事を覺り、泣いて其の罪を悔いた。

附 篇 (三)

と、忽ち神の使は路を避けて、彼の行く手を開いた。そこには最うイオア  
 ンが立つて兄を待つてゐた。其れから後は、アファナシイは黄金を撒いた悪  
 魔の誘惑に陥らなかつた。そして神と人にとに盡すものは黄金ではなくして  
 だ勞働のみであることを知つた。

斯うして二人の兄弟は以前の通りに暮して行くやうになつた。

—了—

<p>大正六年二月十二日印刷          大正六年二月十五日發行          (定價二十五錢)</p>	<p>翻譯者 昇 曙 夢          發行者 佐藤 義 亮          發行所 東京市牛込區矢來町中の丸  <b>新 潮 社</b>          電話番町 一八八〇          電話番町 一八九九          電話番町 一七九二</p>	<p>印刷所 東京市神田區本町五丁目三二八九          (印刷者) 新潮社印刷部          高橋 治</p>
---	---	--



『トルストイ小話文庫』第二編

■イワンの馬鹿の馬鹿■

外數篇

— 福士幸次郎氏譯 —

『イワンの馬鹿』は、露西亞の農民の間に傳はる古き口碑に材をとり、心の貧しきものゝさいはひと、邪智に支配さるゝ者のわざはひとを説いた、童話的色彩に富める物語である。こゝに、四福音書の内容は、最も單純なる、最も明澄なる、最も可憐なる形式に於て顯現されてゐる。トルストイの主義のすべては、この、未だ字を知らぬ小兒にも、無智の老嫗にも解せらる可き平易の

物語の中に、面白き寓話として十分に具體化されてゐる。トルストイの所謂愛とは何ぞ、神とは何ぞ、その倫理觀、宗教觀のすべては、その索引を、この物語の中に見出す事が出来るであらう。大人の讀物としての外、童幼の物語として、また此上もないものと信ずる。附録として添へたる小篇四つも皆この種の作品の中、最も傑出せるものゝみである。譯者福士氏はトルストイに傾倒すること深き新進の士で、その譯筆は『イワン・イリツチの死』を以て世の認むるところとなつてゐる。

トルストイ會館

東京牛込 新潮社出版

# トルストイ叢書

■ 中版約三百廿頁  
■ 定價七十錢  
■ 郵送料一冊八錢

## 第二編 我が宗教

生田長江氏譯  
(三版出來)

杜翁著作中最も重要なものの一。独自の立場より近世の誤れる基督教を正し、眞の信仰とは何ぞやを説くに、半生の心血を凝したる、にがく苦しき體驗を以てせるもの也。

## 第二編 イワン・イリイチの死

福士幸次郎氏譯  
(再版出來)

平凡なる一官吏の生涯を通じて、「死」の問題を取扱へる小説。偉大なる魂のうめきをさながらに聞くが如き傑作也。附録には「主人と下男」「高架索の捕虜」の二篇を添ふ。

## 第三編 幼年・少年

江馬修氏譯  
(再版出來)

是れトルストイが生ひ立の記也。其の藝術家としての手腕と地位とを始めて歐羅巴の文壇に確保したるは實に此の作。就いて偉大なる靈魂の芽生と生長とを見る可き也。

## 第四編 ハヂ・ムラート

相馬御風氏譯  
(新刊)

杜翁遺稿の一。其量と内容とに於て實に掉尾の大作也。材を露國政府が高加索を征服したる當時にとり、回々教の一勇士を主人公として描ける東洋的色彩の豊かなる小説也。

## 第五編 闇の力(附)生ける屍

中村吉藏氏譯  
(新刊)

野獸の如き下層民の生活に材をとり、衰通、墮胎、毒殺、あらゆる罪と悪との闇黒のどん底より良心に目ざめゆく靈魂の曙を描けるもの。トルストイの代表的戯曲は是也。

## 續 青 年

江馬修氏譯

## 刊 コ サ ツ ク

廣津和郎氏譯

著 イ ト ス ル ト

■ 戦争と平和 (全六册) 完了	■ 我が懺悔	■ 人生論 (改版)	■ 性慾論 (改版)	■ 光ある光の中に歩め	■ 奈翁露國遠征論	■ 本脚アンナ・カレニナ
米川正夫氏譯	相馬御風氏譯	相馬御風氏譯	相馬御風氏譯	阿部次郎氏譯	相馬御風氏譯	松居松葉氏脚色
四〇二	七〇八	三〇四	三〇四	三〇四	七〇八	七〇八

■ 子の見たる父トルストイ	■ ロマン著トルストイ	■ オラン著トルストイ	■ ボオル著トルストイ	■ ビルコフ著トルストイ傳
播磨猶吉氏譯	成瀬正一氏譯	相馬御風氏譯	相馬御風氏譯	相馬御風氏譯
八〇八	七〇八	近刊	近刊	近刊

新 潮 社 出 版

364  
102

終